

日本写真家協会会報

NO.162
(2016. JUN.)

- 戦後最大の報道の危機を迎えて
- 亞細亞フォトフェス紀行
- 第41回 2016JPS 展開催

JPS



Photo Hirokawa Ryuichi

EPSON
EXCEED YOUR VISION

すべての光を
顔料で捉える。

A3ノビ対応プリンター
SC-PX7VII
オープンプライス



EPSON ULTRACHROME
K3
A2ノビ、17インチ幅ロール紙
対応プリンター
SC-PX3V
オープンプライス
*ロール紙ユニットは、
オプション対応となります。

すべての色を
黒で極める。



EPSON ULTRACHROME
K3
A3ノビ対応プリンター
SC-PX5VII
オープンプライス

どんな作品も、作り出せる品質がある。

Epson Proselection

エプソンプロセレクション

*出力物はイメージです。*写真はハメコミ合成です。*オープンプライス商品の価格は取扱販売店にお問い合わせください。*この広告に記載の仕様、デザインは2016年6月現在のものです。技術改善等により、予告なく変更する場合がありますので、予めご了承ください。下記電話番号はKDDI株式会社の電話サービスKDDI光ダイレクトを利用しています。下記電話番号がご利用いただけない場合は、携帯電話またはNTT東日本/NTT西日本の固定電話(一般回線)からおかけください。かっこ内の番号におかけくださいますようお願いいたします。

[SC-PX3V・SC-PX5VII] KDDI光^{ひかり}ダイレクト 050-3155-8100 (042-585-8444) [SC-PX7VII] KDDI光^{ひかり}ダイレクト 050-3155-8011 (042-589-5250)
[インフォメーション] [インフォメーション]

ご購入はお近くの販売店 または  エプソンダイレクトで検索 » お電話でも **0120-956-285**

エプソンのホームページ <http://www.epson.jp> エプソン販売株式会社 セイコーエプソン株式会社

フルサイズの、K。

圧倒的な解像度による質感描写と
新たな表現を可能にする高感度性能。
そして、多様なフィールドに適応する
独創的な撮影機能を、一台に凝縮。

PENTAX **K-1**



- 35ミリフルサイズCMOSイメージセンサー ■有効約3640万画素 ■新画像処理エンジンPRIME IV
- ISO 204800 ■5軸5段ボディ内手ぶれ補正機構SR II ■-3EV低輝度対応AE・AF
- 新操作機能スマートファンクション ■フレキシブルチルト式液晶モニター

■ <i>Gallery</i>	JPS ギャラリー 高橋宣之、持田昭俊、森田敏隆、深澤 武 5
	三好和義、中川幸作、山口一彦、上山益男
■ <i>First Message</i>	平成 28 年度定時会員総会を終えて 熊切圭介 13
■ <i>Focus</i>	分断・対決型のアベ政治の術中に陥るメディア 徳山喜雄 14
	—戦後最大の報道の危機を迎えて—
■ <i>Telescope</i>	亞細亞フォトフェス紀行 16
■ <i>Zooming</i>	写真×写真(連載 10) 5年目を迎えた「東日本大震災」 河野和典 22
■ <i>Topics</i>	伝説の写真展「マグナム・ファースト」日本展が開催 24
■ <i>Advanced Technique</i>	撮影技法のトレンドを探る～ドローン活用編～ 26
■ <i>Workshop</i>	著作権研究(連載 37) 濑尾太一 28
	フェアユースと柔軟な規定、その難解な関係を読み解く
■ <i>Archives</i>	「日本写真保存センター」調査活動報告(21) 松本徳彦 30
	写真による記録—遺産を資産に
■ <i>Exhibition</i>	第 41 回 2016JPS 展開催 32
■ <i>Topics</i>	賛助会員トピックス 36
	(株)キタムラ、(株)クレヴィス、(株)ケンコー・トキナー、(株)シグマ、 光村印刷(株)、リコーイメージング(株)
■ <i>Exhibition</i>	「日本の海岸線をゆく－日本人と海の文化」東京展終了 38
■ <i>Digital Topics</i>	着実な流れを感じさせる最近のモノクロ潮流を探る！ 40
■ <i>New Face</i>	平成 28 年度 公益社団法人日本写真家協会 新入会員紹介 42
■ <i>General Meeting</i>	平成 28 年度(第 17 回)定時会員総会報告 47
■ <i>Message</i>	Message Board 48
■ <i>Report</i>	セミナー研究会レポート 50
	CP+2016 特別展示、CP+2016 JPS 講演会、page2016 オープンイベント・ JPS セミナー、第 3 回技術研究会、第 3 回国際交流セミナー
■ <i>Books</i>	JPS ブックレビュー 52
■ <i>Comment</i>	写真解説 55
■ <i>Information</i>	追悼=名誉会員・田中光常、正会員・田畠みなお、柳澤一郎、 56
	坂井哲夫／経過報告／編集後記
■ <i>International</i>	日本写真家協会の沿革(英文) 58
■ <i>Technical</i>	エプソンのデジタルプリント最前線 64
	フィルムをデジタルで楽しもう スキャナーが広げる写真の可能性
	表紙・広河隆一、表 4 ・岩永憲俊

広告
案内

- エプソン販売(株)
- リコーイメージング(株)
- キヤノンギャラリー
- 一般社団法人日本写真著作権協会
- (株) 堀内カラー
- 富士フイルム(株)
- キヤノンマーケティングジャパン(株)
- (株) ニコンイメージングジャパン
- (株) シグマ
- (株) タムロン

Canon

キヤノンギャラリーのご案内

キヤノンギャラリー

◎公募展開催ギャラリー

毎年 2 月と 8 月に募集した作品から選出された写真展を開催しています。



キヤノンギャラリー S 展示風景、諸河久写真展「電車道」～日本の路面電車今昔(いまむかし)～展示の様子

キヤノンギャラリー S・ オープニングギャラリー 1・2(品川)

◎企画展開催ギャラリー

品川本社のキヤノンギャラリー S では、著名なプロ写真家によるさまざまなジャンルの作品展を、キヤノンオープニングギャラリー 1・2 では、グループ展をはじめ フォトコレクションの展示や話題性のある写真展、イベントなどを開催しています。

キヤノンギャラリー S・オープニングギャラリー 1・2(品川)
東京都港区港南 2-16-6 キヤノン S タワー
開館時間 10:00~17:30(日祝休) TEL. (03) 6719-9021

〔銀座〕 東京都中央区銀座 3-9-7 トランシス銀座ビルディング 1F	TEL. (03) 3542-1860 10:30~18:30 (日祝休)
〔梅田〕 大阪市北区梅田 3-3-10 梅田ダイビル B1F	TEL. (06) 4795-9942 10:00~18:00 (日祝休)
〔名古屋〕 名古屋市中区錦 1-11-11 名古屋インタークシティ 1F	TEL. (052) 209-6180 10:00~18:00 (日祝休)
〔札幌〕 札幌市中央区北 3 条西 4-1-1 日本生命札幌ビル 高層棟 1F	TEL. (011) 207-2411 10:00~18:00 (土日祝休)
〔仙台〕 仙台市青葉区一番町 1-9-1 仙台トラストタワー 15F	TEL. (022) 217-3210 10:00~18:00 (土日祝休)
〔福岡〕 福岡市博多区鶴見町 4-1 福岡 RD ビル 1F	TEL. (092) 281-1400 10:00~18:00 (土日祝休)
※銀座・梅田・名古屋の最終日は、15:00 閉館	



◎キヤノンホームページ

canon.jp/gallery

キヤノンマーケティングジャパン株式会社



怒涛——高橋宣之
写真集『BLUE[S]』



カシオペア追憶——持田昭俊

写真集『最後のブルートレイン 星空列車～輝きの瞬間～』
写真展「星空列車～輝きの瞬間～」



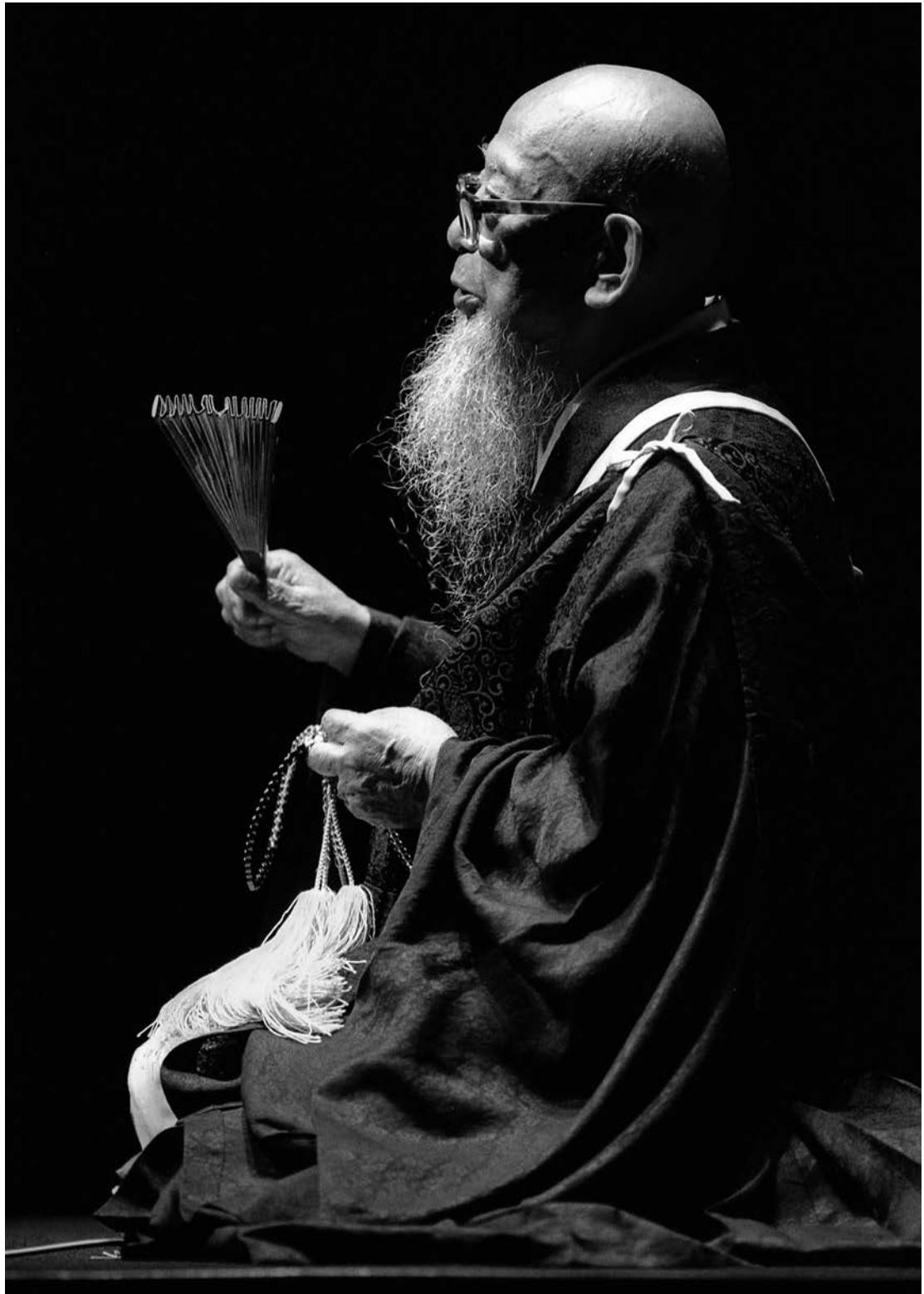
ヒガンバナ咲く江里山の棚田——森田敏隆
写真集『見わたすかぎりの花』



夜明けのマングローブ（沖縄県西表島）——深澤 武
写真集・写真展『沖縄・八重山諸島』



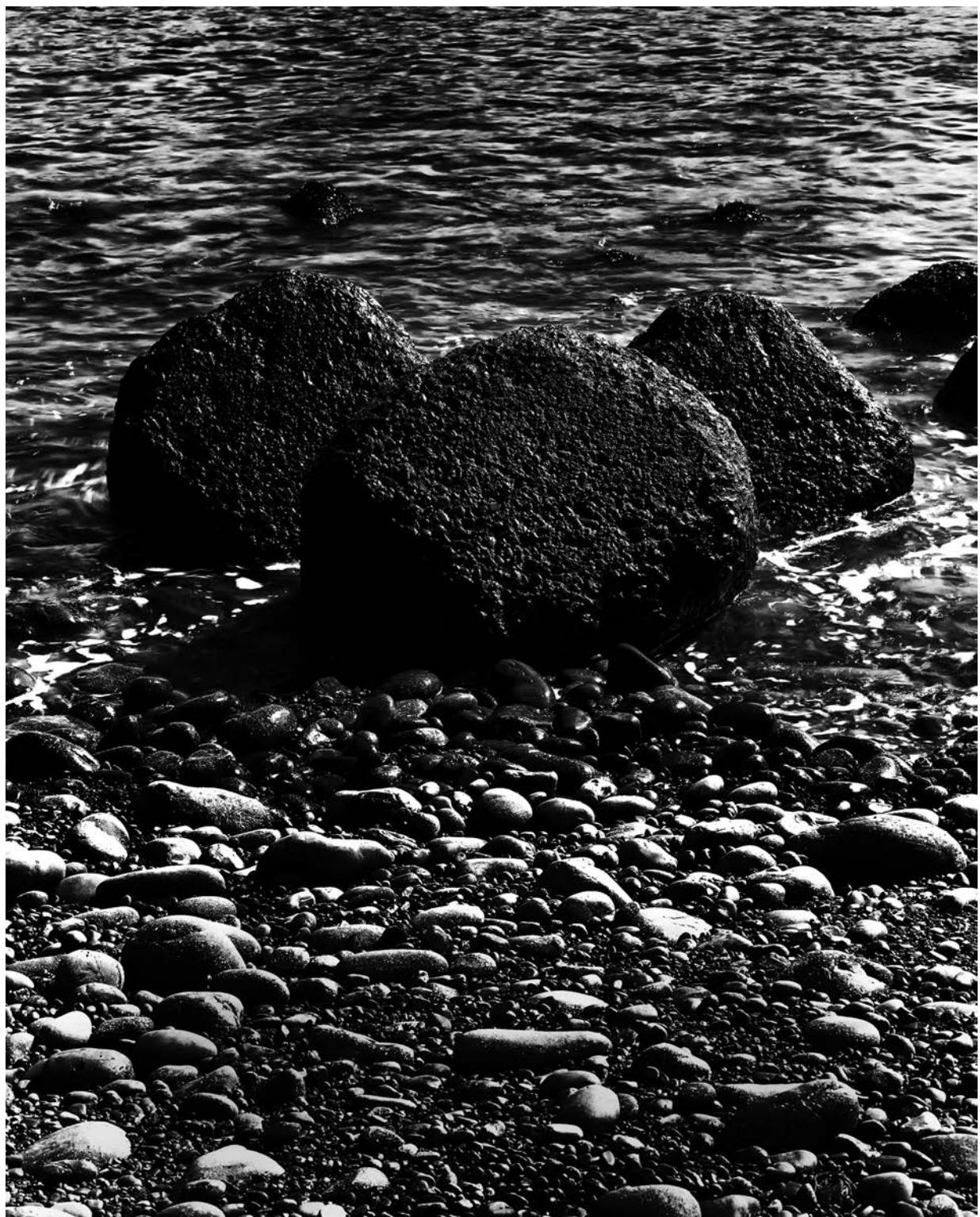
軍艦島——三好和義
写真集・写真展『楽園の跡 軍艦島』



ふしだんせつきょうし
節談説教師 祖父江省念——中川幸作
写真集・写真展『命が煌めく瞬間』



地雷を踏んだ二人——上山益男
写真集『上山益男・写真人生 50 年』



STONE —— 山口一彦

写真集・写真展『STONE』

平成 28 年度定時会員総会を終えて

会長 熊切 圭介

東京都写真美術館が改装中のため、平成 28 年度の定時会員総会は、東京・御茶ノ水のソラシティカンファレンスセンターで開催した。会場の建物は近代的で明るい雰囲気で、JPS の総会の会場に相応しい場所であった。今年度の JPS の新入会員は 52 名と最近では一番多い入会者だったが、その新入会員の参加もあって充実した総会を開催することが出来た。総会は JPS の多種多様な事業活動や運営に関わる様々な問題、決算内容などについて報告し確認してもらった。担当理事や役員による詳細な報告や事業内容を会員に理解してもらうため細部にわたる説明が行われた。報告として平成 28 年度の事業計画、予算、公益社団法人日本写真家協会の細則の一部変更の件、日本写真家協会賞の決定など、協会の運営に関わる基本的な事項について説明し、予定通り終了した。

なお、今年 4 月に熊本で起きた地震の災害については大変心を痛め、被災地の方々にお見舞を申し上げる。不幸中の幸いで熊本、大分地域にお住まいの JPS 会員には大きな被害はなかったようだ。

最近発表された日本のある調査機関の発表によると、ここ 10 年から 20 年の間に、日本で働く人の仕事の 49% は、人工知能やロボットなどで代替されるという。ただし医者や教師、音楽家や芸術に関わる人、映画製作など日常の仕事に創作性や創造力を求められる職業はその限りではなく確率はもっと低いらしい。これも最近話題になったこ

とだが、人工知能が書いた小説がある文学賞の選考を通過したという。もっともこのケースでは、小説のストーリーは人間が指示している。写真家については、調査で触れていないのが気になるところだが、人工知能やロボットに代替されないように、日頃の創作活動や記録を積極的に行いたいものだ。

アメリカのジャーナリズムの世界では、最近の 10 年間で約 17,000 人の記者が主に経済的理由で職を辞しているらしい。記者が減れば当然新聞社なり通信社の戦力が失われることになるが、その分は人工知能やコンピューターが補うことになるので、記事内容のニュアンスが微妙に変化するだろう。そのことを読者はどう受け止めるか興味のあるところだ。

写真家協会は早い時期から、写真著作権の重要性について深い認識を持ち、著作権思想の普及と啓発活動を積極的に行ってきました。その成果もあって多くの人が著作権に関心を持つようになったが、デジタル時代になって出版物のデジタル化が加速し、改めて著作権についての新しい問題点がクローズアップされてきている。JPS は昨年、TPP 施行以後の著作権法の改正などを視野に捉えた『写真著作権第 2 版』を発行したが、SNS 時代のルールとマナーについても『SNS 時代の写真のルールとマナー』(朝日新聞出版刊、7 月発行予定)で詳述している。会員諸氏も、是非熟読していただきたい。

分断・対決型のアベ政治の術中に陥るメディア —戦後最大の報道の危機を迎えて—

徳山臺雄（朝日新聞記者）

はじめに

日本の報道は戦後最大の危機に瀕しているのではないだろうか。

国際ジャーナリスト組織「国境なき記者団」（RSF、本部パリ）は4月、2016年の世界各国の「報道の自由度ランキング」を発表。日本は180カ国・地域で前年より11ランク下の72位となり、大きく後退した。RSFは「多くのメディアが自主規制している。とりわけ、首相に対してだ」と厳しい評価を下した。

ランキングの上位にはフィンランド、オランダ、ノルウェーと北欧や西欧の国が並び、下位はエリトリア、北朝鮮、トルクメニスタン、シリア、中国と独裁国が目立つ。中国本土の影響が強まり、親中派の意向が報道内容を左右する香港が69位。日本はその香港よりも3ランク下と判定されている。日本の政府にとっても報道機関にとっても、たいへん不名誉なことだ。

日本は小泉純一郎政権時代に26～44位を推移した後、政権末期の2006年に51位に転落した。民主党の鳩山由紀夫政権の2010年には11位と過去最高のランクを得た。首相官邸や中央官庁の記者会見をフリーランスや外国人にオープンにした点などが評価されたようだ。西欧諸国と肩を並べたものの、安倍晋三政権発足後の2013年に53位に急落。その後も下降はつづき2014年59位、2015年61位、そして今年が72位と、まるでつるべ落とした。

なぜ、ここまで「報道の自由」が失われたのか。安倍政権発足後の政権と報道の関係をみていきたい。ただ、ここで留意しなければならないのは、政治からの圧力といった政権側の責任に終始するのではなく、RSFの指摘にもあるように報道側の「自己規制」「忖度」といった側面もあわせて考える必要があろう。

したたかな単独会見方式

2012年末、民主党の野田佳彦政権に代わり、第2次安倍政権が誕生した。安倍首相や首相官邸がメディア対策として最初にやったことは、それまでの慣例であった新聞社と首相との共同会見方式をやめ、単独会見方式に切りかえたことだ。横並びの共同会見よりも、「差し（1対1）」でのインタビューの方が報道の自由度が増したようにみえる。

しかし、これはしたたかなメディア戦略で、単独会見の相

手と時期を設定するのは、首相や官邸の判断になる。首相秘書官らが時期を見計らいながら調整し、首相の思いを最大限にアピールすることになった。

政権発足まもない2012年末から在京紙との首相単独会見が順次（最初は読売新聞だった）おこなわれ、読売との二巡目の単独会見で持論の憲法改正について約40分間にわたり熱弁を振るった。読売はこのインタビューの模様を1面トップ（2013年4月16日朝刊）にするのはもちろんだが、特別面（同・17日朝刊）までつくって詳報している。安倍首相は憲法改正への思いを語り、96条の先行改正を初めて本格的に訴える機会とした。

日本での最大部数を誇り、改憲を社論とする読売新聞をこの時期の単独会見の相手に選んだのは自明のことだ。ただ、いまはこのような状態がさらに進み、首相と官邸はメディアをことあるごとに選別し、好意的なメディアからの取材は受け、そうでないメディアを排除している。

たとえば2015年9月、安保法制が成立した。国のかたちが変わるほどの大きな出来事であるにもかかわらず、成立直後にインタビューを受けたのは、首相シンパの産経新聞と日本テレビだった。首相のテレビ出演については各局順番に公平に出演することが内閣記者会と官邸側の取り決めでルール化されていたが、それが崩れ、首相は限られた放送局にしか出演していない。

ちなみに2014年末の衆院選後から2015年9月中旬までで安倍首相がテレビ出演したのは計9番組で、日本テレビ系（読売テレビ含む）、フジテレビ系（関西テレビ含む）、NHKに限られている。このことについて朝日新聞が2015年9月15日朝刊で、同紙の首相動静欄から抽出して報じている。現在もこの傾向は基本的に変わっていない。

公共放送であるNHKは、安倍首相の意を汲むことが自分の本分と勘違いをしているかのような糸井勝人会長が、編集権と人事権を握っているというありさまだ。「報道の自由度ランキング」が大幅に順位を下げて問題になっている最中に、原発報道について「公式発表をベースに伝えてほしい」と発言、物議を醸したのは記憶に新しい。

安倍首相は自分の意見に賛同するメディアからの取材を受けるが、批判的なメディアは寄せつけないという姿勢を貫いている。これは、ふつうではなく異常状態で、強度な報道規制といえる。

二極化し亀裂を深める保革メディア

いまのメディア状況を概観すると、リベラル(左派)と保守(右派)系メディアに、その論調が二極化している。在京6紙でいえば、「朝日、毎日、東京新聞」が一つのグループをつくり、「読売、産経、日経新聞」がもう一つのグループを形成している。放送局も系列ごとに、それぞれ同様な立場で報道している。

多様な意見があるのはいいことだ。ただ、お互いに言いつ放しで終わり、聞く耳持たないというのが現在の特徴で、ていねいに合意形成していこうとする姿はほとんどみられない。2011年3月の東日本大震災による福島原発事故で、原発再稼働派と原発ゼロ派に国論が二分し、安倍政権発足後は安保法制の賛成派と反対派、改憲と護憲をめぐって同様に割れた。慰安婦問題など歴史認識に関する保革メディアの攻防は、2014年の「朝日新聞」問題を頂点に荒れ狂った。このような過程を経て、保革メディアの亀裂はますます深まり、抜き差しならない状況になっている。

政権側が立ち位置の近いメディアを選別して情報を流し、その結果として言論状況の二分化が促進されている点も大きい。かつて2000年前後に個人情報保護法案などメディア規制につながる法案が国会で審議されたときには、出版界も含め、現在のような顕著なメディアの分裂状況はなかった。

こうした新聞を中心としたメディアの大状況は、政権側が目先のことだけを考えるなら、きわめて情報操作しやすい状態である。このようななか、安倍政権は衆参両院で多数派を占め、代表民主制のある種の欠陥だが、次の選挙まで政権党は強行採決という手法をとれば、なんでもできてしまうという「特権」を得ている。

安倍政権下で成立した特定秘密保護法も安保関連法のときも、説得するというまどろっこしいことをせずに、問答無用に採決していった。国会議員の「数の力」を背景に、話し合いを放棄するかのごとく分断・対決型の政治を断行するアベ政治の術中に、野党も国民も報道も陥ったのではないか。

圧力に抗しきれない報道

「報道の自由度ランキング」が発表された前日のことだ。「表現の自由」に関する国連特別報告者のデービッド・ケイ米カリフォルニア大アーバイン校教授(国際人権法)が、日本外国特派員協会(東京・有楽町)で記者会見し、「報道の独立性が重大な脅威に直面している」と警告した。

来日したケイ氏は4月12日から19日にかけて、政府高官や報道関係者、NGO関係者、学者ら数十人と面談、暫定報告書をまとめた。軌を一にするかのようなこの二つの発表は、いずれも「報道の自由」や「報道の独立性」について深刻な問題を投げかけている。海外の専門家から見れば、日本の

報道を取り巻く状況がこのように映っているということでもある。

ケイ氏は放送を中心とした「メディアの独立」に大きな関心を示し、「私の会ったジャーナリストの多くは、政府の強い圧力を感じていた」と明言した。放送の「政治的公平」を定めた放送法4条をめぐって高市早苗総務相が「電波停止」に言及したことについては、「何が公平であるかについて、いかなる政府も判断するべきではない」「政府は脅しではないと言えが、メディア規制の脅しと受け止められている」と断じた。

首相や官邸幹部のメディアを軽視する姿勢は、安倍チルドレンといわれる若手議員にまで波及している。一例をあげれば、自民党本部で開かれた勉強会「文化芸術懇話会」で当選回数2回の衆院議員が「マスコミを懲らしめるには、広告料収入がなくなるのが一番」と、意に沿わない報道に圧力をかける声をあげた。驕り高ぶった言語道断の発言だ。ことほどさように保守系議員による圧力発言はあとを絶たない。

組織的ともいえる圧力としては、自民党は総選挙を控える2014年11月、報道番組に対して「公平中立」を求める文書を放送局に送りつけた。2015年2月には菅義偉官房長官がオフレコ会合であるテレビ番組が放送法に反していると繰り返し批判したと伝えられている。今春には首相の施策に直言するテレビ朝日「報道ステーション」のキャスター古館伊知郎氏、TBSテレビ「NEWS 23」のアンカー岸井成格氏、NHK「クローズアップ現代」のキャスター国谷裕子氏が相次いで降板した。これを偶然といえるだろうか。

英タイムズ紙のリチャード・ロイド・パリー東京支局長は朝日新聞のインタビューに答え、「日本の問題は、ジャーナリストが圧力に十分抵抗していないことだろう」(4月24日朝刊)と言明している。

このコメントは傾聴に値する。「報道の自由」をめぐっての安倍首相や政権、自民党議員らの言動に問題が多いのは事実だ。しかし、報道側はそうした「圧力に十分抵抗」できているのだろうか。

昨今の報道に接していると、「自己規制」や「忖度」することで権力側と迎合し、政権と報道がまるで「共犯者」のように絡まって、「報道の自由」という坂を転げ落ちていっているようみえる。報道側が自壊するかのような行動をとる、これが最大の報道の危機なのかもしれない。

徳山喜雄(とくやま・よしお)

1958年、兵庫県生まれ。1984年に朝日新聞入社、写真部次長、アエラ・フォトディレクターなどを経て現在、記事審査室幹事。月刊「ジャーナリズム」誌の編集にも携わる。著書に『安倍晋三「迷言」録—政権・メディア・世論の攻防』(平凡社新書)、『安倍官邸と新聞—「二極化する報道」の危機』(集英社新書)、『「朝日新聞」問題』(同)、『原爆と写真』(御茶の水書房)など。

欧米とは違う熱気を帯びたアジアのフォトフェス 亞細亞フォトフェス紀行

アジア各地で開催されているフォトイイベント、アートフェアは実に多彩で数も多い。しかし、日本にいるとなかなか情報が入ってこないというのも事実。現地の様子はどんなものなのか、昨年から今年にかけて開催された幾つかのイベントの中から、特徴的なものをピックアップして紹介していこう。

■ はじめに

アジアと言っても経済情勢や人口構成など、その規模も様々で、一言でアジアを言い表すのは難しい。島国もあれば南北に長い国土を持つ国もあり、歴史的にはイギリスやフランスの統治下にあった国もあれば、激しい戦火に巻き込まれた国もある。現在でも政治、宗教、国内外の経済格差、そして近隣諸国との国境問題など、固有の問題を抱えている国は少なくない。

近年、東南アジアに多くのカメラ工場が存在するようになった。これは、安い人件費とチャイナリスクの回避によって生産拠点が移ってきたことによるもので、東南アジアは様々な工業製品の工場の移転先として、世界的に重要な生産拠点となりつつある。その一方で、人口の増加や経済発展を追い風に、巨大な消費地としても注目され始めているのはご存知の通りだ。

アジアでは、数多くの写真関連のイベントが開催されているが、各国の経済発展などを背景に、増加傾向にある。しかしその規模や内容には大きな違いがある。

大別すると町おこし的なイベントから文化交流が目的のフェア、作品の売買を行うためのアートフェア、そして欧米の組織からの支援を受けて、ワークショップやフォトレビューを開催しているフェスティバルなどがあり、フォトフェスというひとつのビジネスモデルとして成立していることが少なくない。



アンコール・フォト・フェスティバル&ワークショップ：
作品の多くは屋外で展示されている

しかし、パリフォトや東川町の国際写真フェスティバルのように、街全体が写真展やイベントで溢れているというのは珍しい。街頭でポスターを見かけることもほとんどなく、一部の来訪者がイベントを盛り上げているというものも多い。

財政的に厳しいのかとも思ったが、情報発信が主にFacebookというのも多くのアジアのフォトフェスの特徴で、伝えたい人だけに確実に伝わればいいという割り切り方が徹底している。Facebookの利用は、ポスター等の印刷物が少ないとことの一因でもあるようだ。初めて訪れる人にとっては、情報の入手が難しい。英語のページも存在しないfacebookページもあったりするが、フォトフェスの情報を手に入れようと思ったら、とりあえずFacebookページを検索してみるというのが手っ取り早いだろう。

ちなみにアジアの写真の共通点として、ブライダルフォトが盛んなことが挙げられるが、ブライダルフォトビジネスが確立されているためか、ブライダルフォトに関するトイイベントというのはほとんど見かけない。

■ カンボジア：東南アジアでもっとも長い歴史を持つアンコール・フォトフェス

アンコールワットの街、カンボジアのシェムリアップで開催されているアンコール・フォトフェスティバル&ワークショップ(APFW)は、日本人も多く参加すること



アンコール・フォト・フェスティバル&ワークショップ：
カジュアルな雰囲気のポートフォリオレビュー

で知られるフォトイベント。東南アジアでもっとも長い歴史を持ち、2015年で11回目を数える。街にクリスマスマードが漂う2015年12月5日(土)から12月12日(土)までの1週間開催された。キヤノンと現地販売代理店などが長くメインスポンサーを務め、今回はメコン地区を開発するスイスの開発庁が加わっていた。またサポートにはIPA (INVISIBLE PHOTOGRAPHER ASIA)、ASIA PACIFIC PHOTO FORUM、ASIA-PACIFIC PHOTOBOOK ARCHIVEなどが名を連ねる。

作品の展示は街のあちこちで行われているものの、イベントの開催時間などの詳細は、基本的にFacebookで案内される。そのため、街中でポスターを見かけることはあまりない。また歩いて見てまわるにはちょっと距離があるため、日中の暑さは結構堪える。会場の移動はトゥクトゥクを利用するのがオススメだが、APFWの開催を知らないというトゥクトゥクのドライバーも少なくなかった。そんなところに行って何があるの? と聞かれることもしばしばあって、歴史の割に地元の人には浸透している様子はあまり感じられない。年中訪れる観光客の目的など、あまり気にしないのかもしれない。

メイン会場となっているのは、キングスロード・アンコールと呼ばれるレストランの集まるエリア。その中の幾つかのレストランを会場に、ワークショップやポートフォリオレビューが行われ、夜になると近くのPCCアンコールでプロジェクションイベントが連日開催されていた。

APFWの最大の特徴は、ワークショップやポートフォリオレビューの参加が原則無料ということ。ワークショップは事前の申し込みが必要だが、レビューは空きがあれば当日の申し込みも受け付けてくれるし、プリントだけでなく、パソコンやタブレットでの作品も見てもらえる。

ワークショップの参加者はアジア各地からの学生や写真家などで、年齢層も幅広い。ワークショップのテーマはフォトドキュメンタリー。6~8人程度のグループワークの中で作品を見せ合いながら、連日講評と撮影を



アンコール・フォト・フェスティバル&ワークショップ：ワークショップの受講者はアジア各地から集まって来る



オールミャンマー フォトグラフィ フェスティバル：ローカル色溢れるフォトコンテストの入賞作品

繰り返して作品のレベルアップを図っていくというもの。まさに写真漬けの1週間となる。優秀者の作品は、最終日の夜にプロジェクト上映されるということもあって、参加者のモチベーションも高い。

とは言え、ワークショップもレビューもオープンでカジュアルな雰囲気の中で行なわれていて、ピリピリした緊張感は感じられない。スタッフの運営も手馴れており、南国特有ののどかさが心地よかった。2016年は12月3日(土)から10日(土)に開催される。

■ ミャンマー：同時期にふたつの国際フォトフェスティバルが開催

政権交代の期待が高まるミャンマーの首都ヤンゴンで、ふたつのフォトフェスティバルが3月下旬に開催されていた。ひとつはヤンゴンの写真家協会の主催で、2016年3月11日(金)から13日(日)の3日間開催された第3回オールミャンマー フォトグラフィ フェスティバル(AMPF)。そしてもうひとつが、3月12日(土)から31日(木)まで開催された第8回ヤンゴン フォトフェスティバルだ。

AMPFを主催するヤンゴン写真家協会は60年の歴史を持ち、設立にはイギリス政府が深く関わったとされている。今回の開催にもブリティッシュ カウンシルが協賛して、その運営をバックアップしていた。作品展示のメインは協会主催のフォトコンテストの入賞作品で、コンテストは58回目となっており、地元密着の感がある。今回は200人を超える応募者から1,500点以上の応募があった。作品のレベルも高く、写真愛好家の多いお国柄が伺える。また会場のヤンゴンギャラリーには、協賛するカメラメーカー、販売店がブースを出展し、即売会を行うなどしてイベントを盛り上げていた。

ミャンマーの水害の被災者を救済するための募金集めに、2015年秋にヤンゴンの環状鉄道を撮影して歩くイベント「Yangon Circle 2015 Photography Project」を企画したのもこの協会で、その際、運営に関わった鉄道写真愛好家の小池隆さんが、今回ワークショップの講師と

して招待されていた。小池さんはミャンマーではすでに人気者で、今回のミャンマー滞在中にも、連日20人を超えるミャンマー人からのFacebookの友達申請があつたのだという。

一方、ヤンゴン フォトフェスティバルはフランスのビルマ研究機関(Institut Français de Birmanie)の運営によるもの。アウン・サン・スー・チーさんからコメントが寄せられ、世界報道写真展の作品が展示されるなど、歴史が長いこともあって、国際色の強いものとなっている。ただし、3月後半の会期はあくまでもメインの写真展の開催会期であって、ワークショップはすでに1月下旬から開催されていた。

今年のイベントのテーマは「目撃者：ミャンマー写真家によるミャンマー」で、ミャンマーの人々の暮らしや内戦の歴史などを追ったグループ展が目立つ。

主催者が異なるとはいえ、いずれのフォトフェスティバルも写真を通して次世代に希望を与えていくこうという意識が強く感じられる。長い間、軍事政権下で抑圧されてきたことも大きいに違いない。3年ほど前から、徐々に表現に関する規制が緩和されるようになったそうで、政権交代前ではあったが、滞在中も街中で自由に撮影ができ、不便さを感じることはあまりなかった。

■ ネパール：震災の復興を目指して始まったフォト カトマンズ

2015年4月に大きな震災に見舞われたネパールの首都カトマンズ。写真による復興を目指した国際的なフォトフェスティバル、フォト カトマンズの第1回目が、2015年11月3日(火)～9日(月)に開催された。震災から半年以上を経たカトマンズだが、街のあちこちにはまだ震災の爪痕が色濃く残っており、崩れたままで手付かずの建物や遺跡も数多く、柱で倒壊をなんとか食い止めているような建物を多く目にした。

初めての開催ということで、ほとんど情報のないまま現地入りしたが、日本写真協会が毎年、東京写真月間で行っている「アジアの写真家たち」の2015年の対象国が



フォト カトマンズ：
街のあちこちの壁が展示スペースになっていた



ヤンゴンフェスティバル：
展示作品を前に解説するディレクターのクリストフ氏

たまたまネパールだったことから、何人かの現地の写真家を紹介してもらうことができた。

フォト カトマンズのメイン会場となっていたパタン地区は、首都カトマンズの南西部に位置する遺跡の街。遅々として進まない復興を憂い、ネパールの若い写真家たちが立ち上げたイベントは、被災地を訪れて復興を支援しようという欧米の観光客はもちろん、興味深げに作品に見入る地元の人の姿も多かったのが印象的だった。ネパール各地からもフォトイベントのために来たという人もいたようで、作品の前にはどこも人だかりができていた。

18の写真展と6つのワークショップが街のあちこちで行われ、スライドショーの上映会が連夜に渡って会場を変えて行われた。作品の多くはネパールの人々の暮らしや文化を伝えるもので、展示は主に屋外の壁面を利用して、スライドショーの上映も屋外で行われた。

日没後に始まるスライドショーには、娯楽が少ないせいだろうか、地元の見学者の姿が多かった。またフォト カトマンズの開催時期は、まだ震災の影響で燃料がなかなか入ってこない燃油危機の状態が続いていたからだ。そのため、日没後には街が真っ暗になる。余計な明かりがないのは、スライドショーには好都合だが、知らない街で危険な思いをしてまで夜間に歩くという観光



フォト カトマンズ：
働く女性がテーマの作品は農作業をする傍らに展示



ヤンゴンフェスティバル：
展示作品は過去の戦争を振り返る内容のもののが多かった

客は少ない。タクシーもつかまらないし、乗れたとしても通常の10倍以上の高額な料金を請求されるのだから、夜はホテル周辺で大人しくしていようと考えるのが普通だろう。それでも会場は物珍しさもあってか、どこもほぼ満員状態だった。

上映会場までの往復も大変だったが、もっとも苦労したのは日没後の底冷えがする寒さだ。標高1,500mを超える地域で、日中との気温差がかなりある。11月ということでそれなりの準備をしていったつもりだが、乾期で雨の降らないということだけが救い。じっとスライド上映を見続けるには辛いものがあった。しかも夜中に開いているコンビニなどない街だから、ホテルに辿り着くまでは温かい飲み物も口にできない。

1回目ということで手探り状態という感は否めないが、震災の復興とともに今後も見守り続けていきたいフォトフェスティバルだ。2016年は10月21日(金)から11月3日(木)にカトマンズで開催される。

■ 台湾：写真文化に対する意識が高く、各地でフォトイベントが開催

写真や映像文化に対する意識の高い台湾では、年間を通じて多くのフォトイベントや大規模な写真展が各地で開催されている。しかし写真に対する関心が高いにも



TAIWAN PHOTO：
邱氏(右)と伊奈英次氏(左)によるギャラリートーク

かかわらず、台湾には写真専門の教育機関がないため、海外で写真を学ぶ台湾人も多い。特に日本とは写真を学ぶだけでなく、写真を通じて文化交流が数多く行われている。これはほかのアジアの国々と大きく異なっている点だ。また、日本文化そのものに対する興味関心も高く、アニメやJPOPを愛する台湾人も多い。そのため、日本語を話せる若い人が多いというのも特徴のひとつだ。

最近では、2016年3月19日(土)から5月8日(日)まで、1カ月以上にわたって台北當代藝術館(MOCA)で開催されていた蜷川実花の個展「蜷川實花展 MIKA NINAGAWA」で、初日に2,400人が来場し、初日来場者数の記録を塗り替えたことが話題になった。

2015年10月1日(木)から4日(日)に、台北の新光三越台北信義新天地で開催されたTAIWAN PHOTO(台湾撮影藝術博覽會)2015は、台湾を代表するフォトイベント。5回目の開催で、台北のフォトギャラリー1839當代藝廊を主宰する邱 奕堅氏が台湾の写真文化を国際的にする目的でスタートしたものだ。東方設計學院、TAIWAN PHOTO 2015 執行委員會、1839當代藝廊が共同で主催し、台湾の行政院文化部、台北市文化局、交通部觀光局が協力している。2015年は、12カ国から60名を超える作家が参加。また企画展「當代攝影藝術的新視覺 New Vision of Contemporary Photography」には日本の伊奈英次氏の「覆蓋(Cover)」と台湾の新鋭の写真家、趙炳文氏の「農舍(Farmhouse)」が展示されていた。出展社数は約20と少ないものの、日本からの出展が約半分と多く、会場では森山大道氏、三好耕三氏の作品なども展示、販売されていた。

2015年11月20日(金)から23日(月)にはTaipei Art Photo Show(台北藝術撮影博覽會)が開催。こちらは、作品の販売を主な目的とするフォトイベントで、3日間で70万台湾元(約200万円)を売り上げた。さらに「三好耕三：2011日本東北地震海嘯災害檔案(東福地震津波災害アーカイブス)」が義援活動としてPhoto Gallery International(PGI)によって販売され、6,600USドルの義援金が集まった。



Wonder Foto Day：
狭いスペースに趣向を凝らして自身の作品をアピール

2016年2月には、若手写真家の発表の場を広げようということで、Wonder Foto Day(台北國際攝影藝術交流展)がスタート。キュレーターの房彦文氏と写真家の馬立群氏が立ち上げたフォトイベントで、タバコ工場をリノベーションした松山文創園区を会場に、約100組が出演して開催された。日本からも出版社のリプロアルテ、PhaT PHOTOが協力に名前を連ねるほか、台湾でも人気を集めている写真家、青山裕企氏がコンテストの審査員を務める。

出展スペースは幅約1mほどのテーブルで、その上に作品が並べられ、対面式のブックフェアのようになっている。若手の作品発表の場ということで、出展者も来場者も若い人が圧倒的に多く、会場は学園祭のような熱気に包まれていた。販売されていた写真や写真集、ポストカードも手頃な値段ということもあり、完売する出展者も見受けられた。2日間で3,000人を超える来場者があったが、女性の来場者も多かった。台湾の写真家、写真愛好家の層の広さを感じさせるものだけに、今後が楽しみなフォトイベントだ。

■ 香港：アジア最大級のアートマーケットを擁し、写真熱も高い

年間を通して様々な展示会やイベントが開催されている香港。中でも春はアートの季節で、香港アートフェスティバル(香港芸術節)、国際映画フェスティバル(香港国際電影節)といった香港ローカルのアートフェスティバルに加え、アジア最大のアートフェア、アートバーゼル香港、アートセントラル、アジア コンテンポラリー アートショーなどが、3月から4月にかけて次々に開催される。

またこの時期に合わせて香港ではサザビーズやクリスティーズのオークションも開催されることから、世界中からアートの買い付けに人々が集まってくると言つてもいい。中国の景気が後退しているとはいえ、国際金融都市・香港は、まだまだ健在だ。

アートバーゼル香港は、スイス北西部の都市バーゼル



アジア コンテンポラリー アートショー：
ホテルの各部屋が出演スペースになっていた



アートセントラル香港：
子供向けのギャラリーツアーなども展開されていた

で毎年開催される世界最大の現代アートフェア、アートバーゼルのアジア版として2014年にスタートしたもの。2013年からは米国のマイアミ・ビーチでも開催されており、欧州、米国、アジアを網羅した、世界規模のアートフェアのひとつとなっている。

2016年3月24日(木)から26日(土)まで、香港コンベンション&エキシビションセンターで開催されたアートバーゼル香港2016には、世界35カ国・地域から230を超えるギャラリーが集まった。日本からもシュウゴアーツ、タカ・イシイギャラリー、日動画廊など10を超えるギャラリーが出演。来場者数は7万人を超え、あるギャラリーでは最初の3時間で275万USドル(約3億円)を売り上げたことが報告されるなど、例年以上に熱く、活況を呈したものとなっていたようだ。

同日程で、香港島セントラルの特設会場で開催されていたアートセントラルは、今年2回目となるアートフェア。スワロフスキー、シャンパンのMUMM、J.CREWがオフィシャルパートナーを務め、アートバーゼルの会場とはシャトルバスで結ばれている。

アートセントラルには、100を超えるギャラリーが出演し、3万2千人を超える来場者があったが、こちらは75%がアジアからの出展というが売り文句で、香港をはじめ韓国、中国、台湾といったアジア各地の出展社、来



HK Photobook Fair：
写真集を直接ユーザーに販売できるのが大きな魅力

場者が多いために感じられた。アートバーゼルに比べると写真を扱うギャラリーが目立ち、日本からもアマナサルトが森山大道氏、アラーキー氏、田原桂一氏、志鎌猛氏の作品を販売していた。

また香港島にあるホテル、コンラッド香港では、アジアコンテンツボラリー・アートショー、HK Photobook Fair 2016などが行われていた。

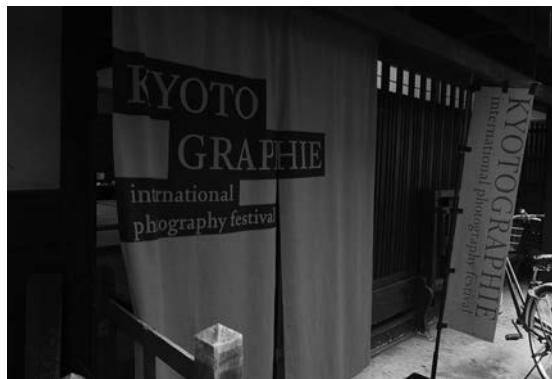
HK Photobook Fair 2016は、T&M Projectsの代表・松本知己氏と禅フォトギャラリーのマーク・ピアソン氏が昨年立ち上げたブックフェアで、アートバーゼルと時期を同じくして開催。会場もアートバーゼルとの会場の目の前のハーバービューホテル。約20の出展のうち半分が日本からで、AKAAKA、うたかた堂、リブロアルテ、小宮山書店、shashashaなどに混じって、個人で自身の写真集や作品を持ち込んでの出展もある会場にはJPS会員の渡部さとる氏、山縣勉氏の姿もあった。香港ローカルの来場者が圧倒的に多いが、Facebookと口コミで、日を追うごとに来場者が増えていったのには、SNSのパワーとともに日本の写真文化に対する関心の高さに改めて驚かされた。まだまだ小規模なイベントではあるものの、出展していた山縣氏も来場者の反応に手応えを感じていたように、日本の写真家が直接海外の来場者と語り合えるという点は、注目されるイベントの一つだろう。

■ 日本:4年目を迎え、スケールアップした KYOTOGRAPHIE と KG+2016

東京写真月間をはじめ、東川町国際写真フェスティバル、塩竈フォトフェスティバル、六甲山国際写真祭(Mt. ROKKO INTERNATIONAL PHOTO FESTIVAL)など、全国各地で様々な写真のイベントが開催されているのは、改めて言うまでもない。

GWで賑わう京都の街を彩るのは、2013年にスタートした KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭。4年目となる今年は「いのちの環」をテーマに市内15の会場で14の展覧会が、2016年4月23日(土)から5月22日(日)まで開催されていた。今年は写真を通して生と死の意味するものや、他とのつながりを考えるための様々なトークイベント、キッズプログラムなども開催され、1ヶ月に及ぶイベントは年を追うごとにそのスケールを拡大し充実している。

KYOTOGRAPHIEでは、国内外の気鋭のアーティストの作品や貴重な写真コレクションを鑑賞できるのが特徴で、会場も虎屋京都ギャラリーをはじめ、市指定有形文化財の長江家住宅、通常は非公開の誉田屋源兵衛黒蔵、建仁寺内にある両足院など、京都ならではの場所で作品を鑑賞することができるよう趣向が凝らされている点も興味深い。ただ、展示会場が市内に点在するため、1~2日で見て回るのにはかなり苦労する。天気が良



京都グラフィー：
会場には赤い暖簾やノボリが掲げられている

ければレンタサイクルなどを利用すると効率よく移動できる。

注目は、第2回目となるポートフォリオレビュー。レビューにはサイモン・ベイカー氏(テート・モダン写真部門キュレーター)、アンドレア・ホルツヘル氏(マグナム・フォト エキシビジョン・マネージャー)、ライアン・リブレ氏(Documentary Arts Asia ディレクター)そして笠原美智子氏(東京都写真美術館 事業企画課長)、太田睦子氏(IMA エディトリアル・ディレクター)といった、そうそうたるメンバー19名が名を連ねる。

また同時期に開催される KG+ は、KYOTOGRAPHIE のサテライトイベントとして市内で開催される48の展覧会を選出したアートイベント。京都から新たな才能を国際的に発信することを目指すもので、世界を舞台に活躍する意欲ある参加者を募って行かれている。海外からの参加者もいて作品もバラエティ豊か。GW期間中は観光客も多く、地図を片手に会場を巡る観光客の姿をあちこちで見かけることができた。

スペシャルエキシビション、アソシエイテッドプログラムを除く30の展覧会からは、KG+ AWARD、KG+ PUBLIC AWARDが選出され表彰される。参加者の参加意欲をかき立てるものとなっている。



日本の写真は世界に誇るべきものだが、残念なことに海外のフォトフェスティバルで日本の写真家やキュレーターが招聘されることまだ少ない。日本の写真家として、ともにアジアで何ができるのか、そんな視点でアジアのフォトフェスを訪れてみるのはどうだろう。

テロの脅威や経済不安など、世界情勢によって開催が危ぶまれるような状況もないわけではない。しかし経済発展とともに文化面でも着実にその歩みは進んでいる。

アジアのフォトフェスはどこも熱くて、パワーに満ちている。まずは現地を訪れてみるだけでもいい。そこで得られるものは多いはずだ。

(記・写真／出版広報委員：柴田 誠)

5年目を迎えた「東日本大震災」

河野和典 KOUNO Kazunori (フォトエディター)

今年は、2011年3月11日午後2時46分に東北地方を中心に行なった大地震・大津波の「東日本大震災」と、それに伴う「福島の原発事故」から5年目という節目である。その傷痕はまだ治まっていない。いずれも現在進行形の自然災害と人災である。この5年間に数多く撮影されたその記録写真や遺品、資料を検証し今後に役立てなければならないことは、戦後70年の「戦争を記録した写真」と同様である。しかし、およそ5年に渡る「3.11」に関連した記録写真は、災害が現在進行形であり、写真展にしても写真集をはじめとする著作物においても同様に現在進行形でおびただしい数にのぼる。そこで今号では、5年目を迎えた今年に入ってからの直近の注目すべき2つの写真展とその図録、写真集に絞って紹介させていただいた。

「気仙沼と、東日本大震災の記憶」

リアス・アーク美術館

東日本大震災の記録と津波の災害史—展

(2016年2月13日～3月21日、目黒区美術館)

目黒区美術館で開催された展覧会だが、タイトルにもあるようにオリジナルはリアス・アーク美術館のものである。リアス・アーク美術館は、宮城県気仙沼市と南三陸町を運営母体とし1994年に開館した公立美術館である。特徴的なのは、主に現代美術を紹介しつつ地域の生活文化を普及するための歴史民俗系常設展示に加えて、3.11の「東日本大震災」をはじめとする震災資料を常時展示していることである。

さて今展の中身だが、そのパンフレット(目黒美術館ミュージアムシート006)によれば、2011年3月16日、当館学芸係は、「東日本大震災記録調査活動」を開始、同月23日には気仙沼・本吉地域広域行政事務組合教育委員会、並びに同組合管理者(気仙沼市長)より公式に特命を受け、その後約2年間、気仙沼市内、南三陸町内の津波被災現場をくまなく記録・調査し、膨大な資料を蓄積。被災現場写真約30,000点、収集した被災物(主に身のまわりの日用品)約250点の中から厳選した資料群に、新聞や過去に起きた津波に関する震災資料を加えた約500点で構成したという。

まず、その膨大で克明な記録に驚くが、「被災現場写真の全てに撮影者コメントを付し、被災物には観覧者の想像を補助するための物語を付し、より普遍的な視点を得るために(108の)キーワードパネルと津波災害史資料を展示し、展示全体を一種のインスタレーションと位置付け、より感覚的に資料と対話できる空間をデザイン」(リアス・アーク美術館学芸係長/学芸員・山内宏泰)というのには、さらに驚かされた。ここには写真と被災物と言葉を立体的に組み合わせ、しかも過去の災害史までをも重層的に展開して、まさに圧倒的な説得力を示している。これは主催者の一員である学芸係が、被災者としての立場をも踏まえて主体的に関わったからに他ならない。

それは(ちょっと引用が長くなるが)次の展示写真に添えられた哲学的な「キーワード」にも表れていた。

「■歴史…《過去・現在・未来》／歴史を学ぶということは、未来を創造することに等しい。過去の出来事と、その後、今日まで積み重ねられてきた様々な人間の営み、思考の蓄積を見ることで、今、自分たちがすることと、それによって創造されていく未来を考える。そのために私たちは歴史を学ぶ。／東日本大震災はすでに過去となつた。しかし、あの出来事は歴史上、想定できた未来の出来事だったのである。現在、私たちが直面している「今」は次の瞬間から過去となり蓄積される。その蓄積がすでに未来を形作り始めている。私たちが行う全てのことが未来を創造する。その責任は非常に大きい。(後述略)」

そしてもう一つ。「■歴史…《未曾有》／未曾有とは『今までに一度もなかったこと』という意味である。つまり、東日本大震災を表現するにあたって、未曾有という表現は適切とは言えない。なぜなら、三陸沿岸部において同様



『東日本大震災の記録と津波の災害史』リアス・アーク美術館常設展示会場／リアス・アーク美術館提供

の津波災害は頻繁に繰り返されてきたからである。(後述略)」(以上、『リアス・アーク美術館常設展示図録／東日本大震災の記録と津波の災害史』(2015年2月、リアス・アーク美術館)より)

私の本棚のよく見えるところに大震災前から福島泰樹+立松和平責任編集の文芸誌『月光』創刊2号(2010年7月、勉誠出版)があって、ただ漫然と眺めるだけであったのだが、震災後ある日突然、その表紙に〈発見! 宮沢賢治「海岸は実に悲惨です」〉とあるのに気がついた。これは

昭和8(1933)年に発生した昭和三陸大津波のとき、岩手県花巻町に住んでいた宮沢賢治が詩人の大木実からもらったお見舞いに対する返信の葉書が見つかったというものであった。そこには「この度はわざわざお見舞いありがとうございます。被害は津波によるものが多く海岸は実に悲惨です。私の方野原は何ごともありません。何かにみんなで折角春を待つてゐる次第です。まづは取急ぎお礼乍ら。」とある。

「災害は忘れた頃にやって来る」とか、あるいは「時代はめぐる」と言われるが、問題は今、人間が自然のリズムにいかに対処できるのかが問われているのだ。何度もあつた三陸大津波からの教訓が「3.11」で生かされなかつたことを問い合わせる展示もある。

今や、いつどこで起きても不思議ではない地震と津波の災害である。「熊本地震」からは、全国ネットを生かした救助活動が模索されているという。

*リアス・アーク美術館

〒988-0171 宮城県気仙沼市赤岩牧沢 138-5
TEL: 0226-24-1611 E-mail: riasark.m@nifty.com

岩波友紀写真集『1500日 震災からの日々』

(2016年2月、新日本出版) および

写真展「もう一度だけ／One last hug —津波に奪われた命—」

(2016年3月2日～3月15日、銀座ニコンサロン、
3月31日～4月6日、大阪ニコンサロン)

こちらは、「3.11」直後から1,500日、被災者を訪ねながら震災からの日々を写真集にまとめたのが『1500日 震災からの日々』であり、その中から行方不明の幼い我が子を捜す3人の父親を取材して写真展にまとめたのが「も



リアス・アーク美術館常設展示図録『東日本大震災の記録と津波の災害史』(2015年、リアス・アーク美術館)〈内容〉現場写真、被災物、歴史資料、Key word 東日本大震災を考える我われのキーワード、展示解説、付録『東日本大震災 記録調査活動』報告書

う一度だけ／One last hug—津波に奪われた命—」である。「3.11」直後から1,500日といえば、撮影された写真の整理作業を考えればほぼ毎日、災害の記録に明け暮れたことが想像される。

多くの震災の写真がおびただしい無残な光景をダイナミックに写しているのに対して、この作者の写真は、人物中心にまるで被災者に寄り添うよう

に、無言ながらコミュニケーションしながら撮影されているものが多い。この世に生まれ、共に生活してきた人をそして家を一瞬に失う悲しみとはいかなることか、それを追求した写真とも言えるようだ。

写真集の〈はじめに〉には、「自然災害である地震と津波、人為的な原発事故。この大きな出来事を経験してその後、今の社会はどうなっているのか、それを大局的に言うことは自分にははばかられました。(略) しかしもっと小さな視点で、私が関わらせていただいた人たちのありのままの姿を見ることによって、それをかいま見ることができないかと考えました。」とあり、〈おわりに〉の文章の最後には、「命を守りこの大地で生きることを守るという一番大切なことのために何をしたら良いのか。それをもう一度、考える機会になればと願います。」とあった。これはリアス・アーク美術館の学芸員スタッフのスタンスと違わないように思われる。

*岩波友紀(いわなみ・ゆき)

1977年長野県生まれ。フォトジャーナリスト。読売新聞写真部を経てフリー。福島市に居住し、東日本大震災と福島第一原発事故を今も撮影しつづける。オンライン誌「The PHOTO JOURNAL」主宰。



岩波友紀写真展 「もう一度だけ／One last hug—津波に奪われた命—」案内はがき

1500日
震災からの
日々 岩波友紀



ひとりひとりの
「その後」

岩波友紀写真集『1500日 震災からの日々』

伝説の写真展「マグナム・ファースト」 日本展が開催

「世界最高の写真家集団」といわれるマグナム・フォト。半世紀ぶりにオーストリアで発見されたオリジナルプリントによる写真展「マグナム・ファースト」が、2016年4月23日(土)から5月15日(日)にかけて、東京代官山ヒルサイドフォーラムで開催されました。



■ 60年前の幻の写真展

ロバート・キャパ、アンリ・カルティエ＝ブレッソン、エルンスト・ハース、マルク・リブー、ワーナー・ビショフなど、マグナムの写真家8人によるモノクロ写真展「Face of Time — 時の顔」は、マグナム結成後に初めて企画された写真展で、第二次世界大戦終結から10年後の1955年にオーストリアで開催されました。

写真家自身が企画し、構成したこの写真展は「写真によるヒューマニズム」というマグナムの理想を最も明快に伝えていると言われています。大戦の傷跡が癒えぬ時代に世界各地で撮影された写真には、人間の日常が生々しく映し出されるとともに、写真家たちの平和への強い想いが込められています。



会場となった代官山ヒルサイドフォーラム(撮影／山縣 勉)

その後、これらの作品の行方は知られることはありませんでした。しかし2006年にオーストリア、インスブルックのフランス文化会館の地下室で木箱に収められた83点、全ての作品が発見されました。1955年当時のオリジナルプリントがそのまま再現され、写真展は「マグナム・ファースト」として、再び現代に蘇ることになります。

2008年よりドイツ、オーストリア、スペイン、韓国などの11都市を巡回し、このたび日本で初公開されました。本展は、当時の貴重なモノクロ写真の展示とあわせて、記念レクチャー、作家の椎名誠氏や写真史家の金子隆一氏のギャラリー・トークなどのイベントも開催され、多くの写真ファンが訪れました。



貴重なオリジナルプリントが並ぶ(撮影／小野吉彦)



椎名誠氏のギャラリー・トーク(撮影／小野吉彦)



イング・モラスの作品に見入る来場者(撮影／小野吉彦)

■現代に蘇る「マグナム・ファースト」

半世紀前の伝説の写真展がそのまま再現された本展。写真家ごとにカラーリングされた木製ボードに貼られたオリジナルプリントは当時のままで。無骨に切り取られ、釘を打った跡や番号が残されたボードは何を意味しているのでしょうか。安全に巡回するためにとられた方法であるとも、また当時の展示方法の流行であったとも言われています。半世紀前、写真は雑誌に掲載されるものであり、マッティングされたプリントを額装して展示するという形態は一般的ではありませんでした。

会場には、プリントが収められていた木箱、当時使われた展示指示書、巡回したギャラリー宛のラベル、また展覧会で掲示された写真家名のプレートも展示され、



木製ボードに貼られたプリント(撮影／山縣 勉)



2006年に発見された木箱(撮影／山縣 勉)

関わったマグナム写真家や関係者たちの仕事への情熱や息づかいまでもが伝わってくるかのようでした。

本展の実行委員会事務局長であり、JPS会員の渡邊英昭さんは、2008年に本展の存在を知り、その後2014年にハンガリーで実際の展示を見て衝撃を受け、日本での展示に向けた強い気持ちを抱いたといいます。その後奔走して実行委員会を立ち上げ、各方面に協賛、協力を依頼して東京での展示が現実のものになりました。

会期は3週間。マグナムのファンは意外にも年齢層が幅広く、想像以上に多くの若い人が来場してくれたそうです。写真界だけでなく様々な人に本展を見ていただき、それぞれにとって何かのきっかけや刺激となって欲しかったと渡邊さんはいいます。

展示は戦後10年間に世界各地で撮影された写真で構成され、終戦後の穏やかな空気の中で各国の生活、文化や風習が活き活きと表現されています。ファッション業界の人は洋服のデザインや生地に目を奪われ、建築に興味のある人は背景の建物や町並みに見入り、また写真の原点ともいえるモノクロ写真を目にして、再び銀塩プリントでの制作を決意した写真家もいたそうです。

■時を超えてメッセージを発し続ける

1955年当時の本展の評価はどのようなものだったのでしょうか。渡邊さんによると、あまり記録が残されていないそうです。当時マグナムといえば戦争写真というイメージが一般に定着していました。しかしこの展示に生々しい戦争の写真はありません。戦後に世界各地で撮影されたどこか穏やかなスナップショット群は、マグナムの印象と少し離れているという声もあったようです。写真家たちは戦時に最前線に身を置き、また戦後の世界をも撮ることで平和を願う気持ちを強め、それをあらためて世に問いかけたかったのでしょうか。

政治、経済、宗教……戦後70年を経た今、世界は混沌の中にあると言わざるをえません。当時のマグナム写真家たちの平和への想いが込められた写真は、私たちにあらためて現代社会を見つめ直す機会を与えてくれたように感じます。

(取材／山縣 勉、小野吉彦)

撮影技法のトレンドを探る

～ドローン活用編～

写真の撮影技法や表現手法は機材の進化やテクノロジーの発展とともに変化を遂げてきました。新しい手法を作品制作にいち早く取り入れている写真家を通じて写真のトレンドを探っていく本稿の第一回では、近年急速な勢いで応用が拡大している「ドローン」(多軸式のラジコンヘリ)を使って迫力ある空撮映像を撮影しているJPS会員 林 明輝氏と天神木健一郎氏の取り組みを紹介します。(文責／出版広報委員：関 行宏)



林 明輝

2013年、モーターパラグライダーのパイロット証を取得。同時に、ドローンを駆使して自然風景を撮り始め、日本の絶景写真集『空飛ぶ写真機』(平凡社)を出版。日本各地で同名の写真展を開催する。日本自然科学写真協会理事。

Q. ドローンを導入した理由を教えてください。

林：30年近く撮影を続けてきた日本の風景を新たな視点から撮りたくなり、ラジコンヘリコプターを導入したり、モーターパラグライダーのライセンスも取得したりしたのですが、安全に、かつ、一人で操縦と撮影が同時にできるというメリットを考えて、2012年にドローンを導入しました。現在は Freefly Systems 社の「Cinestar-6」(6軸)や DJI 社の「S900」(同)にソニーのデジタル一眼レフ「α7R」や「α7R II」などを搭載し、ライブビュー映像をアナログ映像信号に変換したのち電波で飛ばして、地上のモニターで見ながら遠隔操作で静止画や動画を撮影しています。

Q. どのような表現が可能になりましたか？

林：飛行が許されている 150m 未満の高さからあたかも鳥の目線で遠近感を表現できるため、視点に新鮮さが感じられ、撮り尽くしたと思っていた風景もまた違った作品として表現できるのが大きなメリットです。空からの実際の映像を地上のモニターで見ると思い描いていたイメージと違うときもあり、新たな発見と楽しみを感じながら撮影しています。

Q. 「空飛ぶ写真機」(平凡社)という写真集を出版されました。

林：2015年5月に「空飛ぶ写真機～ドローンで見た日本の絶景～」という写真展をソニーイメージングギャラリーで開催するにあたり、日本各地の絶景をドローンを使ってもう一度見つめ直す作業を行いました。そ

れらの作品をまとめた写真集を企画し提案したところ、平凡社にご快諾いただき出版が実現しました。

Q. これから取り組みを教えてください。

林：従来どおり三脚を使った風景撮影ももちろん続けていきます。写真を見たかたが、どこからどう撮影したのだろう？と、イメージを膨らませていただけるような鑑賞に堪える作品を数多く撮って、景勝地の観光アピールや振興にも微力ながら貢献できたらと願っています。同時に、単に上空から撮っただけの写真にならないよう、作品のクオリティをさらに高めていかなければ



1400ha もの広大な面積をほこる千葉県の盤州(ばんず)干潟。製鉄事業のために建造された浸透実験池を上空から俯瞰。現在は、野鳥の宝庫として知られている。
(撮影／林 明輝)

ばかりません。ちなみに、ドローンにご興味のあるかたは、撮影場所の所有者や管理者に許可を取るとともに、2015年12月に改正された航空法を順守いただいた上で、新しい表現に取り組まれることを期待しています。



てん じん き けん いち ろう
天神木 健一郎

鹿児島県生まれ。風景撮影のほかゴルフ関係の撮影を主な仕事としており、ドローンによる空撮を1年前にスタート。従来どおりの撮影を続けながら新しいテクニックにも積極的にチャレンジしている。

Q. なぜドローンを使った撮影を始めたのですか？

天神木：ゴルフコースを撮影する仕事を数多くしていました。鳥の目線で撮影できたら素敵だろうなあ、と考えていたときに、ドローンを使って撮影された仏モン・サン=ミシェルや長崎県の軍艦島の映像を観る機会があり、一発でその魅力に惹かれました。さっそく1万円ぐらいのおもちゃのドローンを買ってきて、メーカーの操縦講習会に参加したのちは、飛行が禁止されていない安全な場所を探して操縦を独学で練習しました。

Q. どのような機材を使い、どのように撮影していますか？

天神木：DJI社の「Phantom 3 Professional」(4軸)を使っています。ソニー製センサーを採用した小型カメラがあらかじめ搭載されているので、カメラを別に用意しなくても1200万画素の静止画または4K動画が撮影でき、専用アプリ「DJI GO」を介してライブビュー映像をタブレットで確認できるなどの特徴があります

。光を見ながらアングルやポイントを探して撮影しますが、飛行中は距離感が掴みにくいため機体を見失なわないことが重要です。風にも気を遣いますし、ときにはカラスが機体に接近して焦ることもあります。

Q. どのような表現ができるようになりましたか？

天神木：まさに鳥になった感覚です。池の上や森の上など、これまで撮ることのできなかったポイントからゴルフコースを撮影できるだけでなく、海沿いのコースであれば海上からの撮影も可能になりました。撮影を担当する私自身、表現の範囲が広がったことを嬉しく思っていますし、写真や映像をプロモーションなどに利用されるコースにとっても価値があると考えます。また、空中での流れるような動きがドローンの魅力のひとつなので、現在は動画撮影にも取り組んでいます。

Q. 今後について聞かせてください。

天神木：ドローンを使い始めてからまだ一年ほどしか経っていないため、撮影はまだ手一杯で余裕はありません。実のところ100%満足のゆく会心の一枚もこれからです。まずは使いこなしに努めながら、ほかにも魅力的な新しい撮影方法があれば積極的にチャレンジしていきたいと考えています。



桜に囲まれた春の「東松苑ゴルフ倶楽部 #12h」(栃木県)

(撮影／天神木 健一郎)

ドローン (drone) :一般には多軸式のラジコンヘリ (マルチコプター) を指し、民生分野では、空撮のほか、農薬散布、運搬、災害調査、測量などの利用が広がっている。機体はホビー用であれば数千円から、空撮に適した高性能な機体は10万円程度から。2015年4月に首相官邸屋上にドローンが落下したことが契機となって同年12月に航空法が改正され、人口集中地域、空港周辺、150m以上の高度などでドローンを飛ばす場合は国土交通省の許可・承認が必要になった。



カメラを搭載して飛行するドローンの例(写真提供／林 明輝氏)

フェアユースと柔軟な規定、その難解な関係を読み解く

瀬尾太一（日本写真著作権協会常務理事）

TPP（環太平洋パートナーシップ協定）が合意に達し各国の批准段階になりました。協定が拘束力を持つには時間が掛かりますが、各国の政治政策は変化していくものと思われます。日本では自民党知財戦略本部の知的財産推進計画 2016 を見れば政策の方向性が見てきます。オープン・イノベーションに向けた知財マネジメントの推進、デジタル・ネットワーク時代の著作権システムの構築などが掲げられています。この中で危惧することは著作権で保護している著作者は殆ど個人です。システムの構築やイノベーションに参加する大・中企業が、どのように著作者と折り合いを付けるのか、見ていかないといけません。文化庁著作権審議会には著作権法改正を含む提言が出されています。

（著作権委員会 堀切保郎）

フェアユース議論の混乱

数年前から、著作権に関する話題の中で「フェアユース」という言葉を聞きます。ぱっと聞いたところ、そのまま「公正な利用」のことか、と思うかもしれませんが、もともと、アメリカの著作権法に定められている規定のことを指しています。そして、このような趣旨の立法を日本でも行うことが必要だ、という意見から、長い時間、文化審議会を初め、政府関係の各所でも議論、検討されてきました。また、同時に「柔軟な規定」「さらに柔軟な規定」そして謎のような「C類型」なる言葉が、この議論の中では取りざたされています。

もはやここまで来ると、何が何だか分からぬ、という感想が一般的でしょう。そして著作権に興味があり、概論を理解している人でも、なかなかこの問題のポイントを押さえている人は少ないと思われます。そんな理解の深さがバラバラな状態で、フェアユースを始めとした各規定の導入の是非が問われています。そこで、今回、この内容をまとめて概説し、著作者はどのようにこれを理解したらよいのか、指針となるようにまとめてみたいと思います。少々、ややこしい話ですが、大変重要なテーマですので、是非、ご一読いただければと思います。

フェアユース規定とは？

「フェアユース規定」は、このような場合は、著作権があるても使っていいよ、という権利制限規定の一種です。そこで規定される内容は、社会的に公正な利用だと認められる利用であれば、権利制限の対象とする、ということです。これはアメリカの著作権法によって定められているのですが、では、公正であるかどうかを、どう判断するのか、というと、それは裁判で決めて下さい、ということになります。つまり、法律で決定できない案件を、司法にゆだねる、という法律もあります。

アメリカにおいてはこの「公正な利用」について、長い時間をかけた判例の蓄積があり、ほぼその内容は判例によって限定されています。ただ、Google のように、新しい利用についてフェアユースの範囲を拡張する判例を作るべく、訴訟を起こしていく場合もあります。基本的に、この法律はアメリカの集団訴訟や懲罰的な賠償制度と密接に関連することでバランスを取っている制度です。つまり、むやみにフェアユースを主張して利用しても、訴訟を起こされて、懲罰的な賠償制度で大きな金額を損失する可能性があれば、そう軽々にこの適用を主張できない、ということなどがあるのです。

ここでフェアユースについて要約すると、権利制限規定のひとつであり、アメリカの著作権法の中で、他の制度とバランスを取りながら機能する規定である、と言えるでしょう。

なぜ今、フェアユースか？

では、そのような規定を日本に導入しなければならないという議論は、なぜ生まれてきたのでしょうか。これには大きく分けて二つの理由があります。

ひとつは Google がフェアユース規定を利用して図書館の書籍を全文スキャンしたことから、アメリカの企業の進出に対して、日本でも同様の規定がないと対抗できない、という意見です。Google の黒船来襲騒動は以前にもこの会報で書きましたが、このように長く影響を及ぼし続けているのです。

もうひとつは、TPP によって、日本にアメリカ型の著作権ルールが導入されるということ、しかもその導入は権利保護の方向にあることから、バランス論として利用促進をはかるフェアユースを入れるべし、という意見です。

このような意見に基づいて、導入すべきか否か、という議論が行われてきました。しかし、海外を見ても、このフェアユースのような規定は、かなりアメリカの独自色が強い

もので、これに類する規定はイギリスでフェアディーリング規定がありますが、ヨーロッパでは導入が難しいとされています。日本の著作権法の考え方は、ヨーロッパの法律に近いので、同様に導入はかなり難しいという見方が一般的です。

「フェアユース」から「C類型」、そして「柔軟な規定」へ

更にフェアユースの議論については、ふたつの時期に区分されると考えられます。これは前述のGoogle ブックス キャン問題をきっかけに導入が提唱された時期、それから TPP の著作権条項などと連動して導入が提唱されている現在、です。

最初の時期をフェアユース議論第一期、現在を第二期とすると、第一期でアメリカ型のフェアユース規定の導入が見送られ、変わって導入されたのが日本型の「一般規定」と呼ばれるものです。これはアメリカ型は日本になじまないものの、問題点は解消すべきであるとして、日本の状況に合う、解釈余地がこれまでより広い条項を加えたものになります。「日本版フェアユース」とも呼ばれます。アメリカ型のフェアユース導入を提唱する人たちには、似て非なるものと大変評判が悪いものでした。この規定は平成24年の著作権法改正に盛り込まれ、現在、著作権法に含まれています。

この一般規定は、導入の段階で A、B、C の3類型に分けて説明されました。A 類型は付随的な利用、B 類型は利用の過程における利用、C 類型が著作物の表現を享受しない利用です。このわかりにくい類型も、前者ふたつの類型は、例えば A 類型は写真を撮影したら、背景に著作物が写りこんでしまった場合、B 類型は社内で広告用写真を選考する過程で、その候補を複数する場合に権利が制限される、など例を取ってみれば比較的の理解しやすいものです。

ここで現在でも議論の対象になるのが C 類型です。これは日本の法制度の中で、これから技術革新に対応するためにかなり解釈の幅を持って制定されたものです。もちろん、アメリカ型のフェアユースとは異なりますが、この C 類型を立法化したことで第一期の議論は収束しました。

しかし、TPP をきっかけとして、これではさらなる技術の進歩に間に合わない、アメリカなどとの競合に勝つためには、より幅の広い権利制限が必要である、という議論が出てきました。これが先ほどフェアユース議論第二期と呼んだもので、まさに現在継続しています。ここでは、フェアユースという呼び方自体が誤解を生むものだったとして、このような一般規定を「柔軟な規定」と言い換えることしました。つまり C 類型を含む現行の法律の拡張にとどまる規定を「柔軟な規定」、これより範囲を大きく広げる「アメリカ型のフェアユース」に代表されるような規定を「さらに柔軟な規定」と呼び変えたのです。これが現在の議論であ

り、現在は「柔軟な規定」(C 類型などの延長的改正)と「さらに柔軟な規定」(アメリカ型に近い法改正)、これらの導入是非の議論となってきています。

どのように考えるべきか

では、このような議論について、どのように考えればよいのでしょうか。いくつかのポイントに分けて考えてみましょう。

まず、アメリカ型フェアユース規定については、その基本に契約社会、訴訟社会の成立が条件となるという点があります。日本はアメリカのように気軽に訴訟を起こせる国ではありませんし、どんなに悪質な利用でも、勝訴したところで実質的な賠償金しか得られませんので、訴訟ですべてを決めていくことは権利者にとって不利になると言えます。

また、企業側にとっても、知財関連の弁護士など訴訟対応を整備している企業は少数ですし、あつたとしても大企業に限られます。これに対して、例えばアメリカの企業などはその体制が準備されており、リスクを抱え込むことにも慣れています。つまり、権利者と企業では権利者が不利ですし、外国企業と国内企業であれば国内企業が不利になる可能性が高いでしょう。もちろん、一般論でこれらをくくることは大変危険ですが、実務としては国内でこの立法によって利益が得られる権利者、企業は、極めて限られたものではないでしょうか。

ただ、技術の革新によるビジネスの可能性を著作権法が阻むことはもちろん望ましくありません。日々、急激に進歩する技術革新に伴うビジネスチャンスに対して、立法の速度が極めて遅いことも事実です。このために現在の著作権法の延長上にある「柔軟な規定 (C 類型など)」は検討を行ってもよいと思われます。

最後に一つ付け加えますが、現行の著作権法が制定されて約45年が経過しました。その間、社会的にあまり変わらない部分がある一方、大きく変わった部分も多数あります。コンピューターと電子情報網の発達は、今や AI とディープラーニングによる自動創作物の生成まで可能な社会を生み出しています。これは、著作権法改正当時の昭和46年、誰もが予想すらしなかったものではないでしょうか。このような環境変化に対応するためには、著作権法自体の基本的な見直しを検討する時期に来ているのかもしれません。

瀬尾太一(せお・たいいち)

写真家 2002年から2013年まで文化審議会著作権分科会委員、文化庁各小委員会委員等を歴任して著作権行政にかかわる。(一社)日本写真著作権協会常務理事、(公社)日本複製権センター副理事長・専務理事代行、(公社)日本写真家協会著作権委員会委員。

「日本写真保存センター」調査活動報告(21)

写真による記録 — 遺産を資産に

松本 徳彦 (副会長)

出来事を記録し後世に伝える手段としては、絵画や彫刻が古くから用いられていた。19世紀中頃に発明されたダゲレオ・タイプの発明によって、記録手段に革新が起こった。それが写真である。事物を瞬時にしかも精緻に記録する手段としての写真は、あっという間に絵画を凌駕し、その後の記録手段として急速に発展した。そして約170年後に再び変革が起こった。それがデジタル技術である。いまやデジタル技術を利用しないものはないほどの進化である。

こうした記録手段の変遷もあるが、私たちはこれまで先輩たちによって、記録されてきた膨大な写真を精査することによって、過去の出来事や伝統文化を後世に残し伝承することの必要性を感じている。写真保存センターの役割はこうした遺産を資産にする作業である。

岩宮武二 (1920 ~ 1989)

日本文化の伝承と仏教遺跡の記録に尽力

1920(大正9)年米子で生まれた岩宮武二は、大正末期から昭和にかけて隆盛を極めていた絵画志向の「芸術写真」の代表的な日本光画協会(主宰山本牧彦 28年)の系列で、山陰の塩谷定好によって結成された米子写友会(1931年結成)に加わり、先輩の植田正治、堀内初太郎らとアマチュア時代を過ごす。大阪の造船所に務め、関西写壇の重鎮安井伸治、上田備山の推薦で丹平写真俱楽部に入会(39年)。「早春」で特選受賞。戦後は瑛九らとデモクラート芸術協会(51年)を創設し、モダニズム傾向の造型感覚にあふれた作品を次々と発表し脚光を浴びる。その代表的なカラー作品に「マヌカン」(54年)がある。この頃から「佐渡」に何度も渡り、厳しい風土とその中で生きる人々の暮らしを、粗い粒子のモノクロで表現する。これがかえって日本海から吹き付ける風雪に耐えながら暮らす、島民の日常を浮き彫りにする効果をあげ、55年個展、59年写真集『佐渡島』を著わす。

経済成長期に差しかかった折り、コマーシャル分野でも目覚ましい活躍をする。研ぎ澄まされた造型感覚で、日本の伝統的な「かたち」をモチーフに、鮮やかな色彩と造型美を徹底的に追求した大型の写真集『かたち・日本の伝承』(62年)を上梓し、日本写真協会年度賞を受賞する。この頃から海外にも取材範囲を広げ、なかでも東南アジア、



「日覆」1946年

中東に強い関心を示し、『アンコール・ワット』(84年)、『ラダック 曼荼羅』(87年)、『アジアの仏像』(89年)、『ボロブドゥール』(90年)と次々出版する。いずれも大作で、いまではテロで破壊された貴重な仏像なども撮影している。

国内では『日本のやしろ 日光』(62年)、「佐渡 腕白小僧」1956年、『厳島』(64年)、『宮廷の庭』(68年)、『日本海』(72年)、『京都』(78年)と枚挙に暇がないほどの多数の写真集を出版され海外版も含めると数十冊に及ぶ多作であった。

また、1966年から大阪芸術大学の写真学科教授として、後輩の指導に当たるなど、作家活動のほか教育分野での活動など関西での写真界に大きな足跡を残された。写真原板や資料は最後の助手であった近藤宏樹会員の元で保管されていたものから収集した。



写真原板の収集作業 豊中 リアル・フォトグラフ 2016年
(撮影／松本徳彦)



芳賀日出男 (1921 ~)

民俗写真の先駆者

芳賀日出男は1958年銀座の小西六フォトギャラリーデ、古来からの稻作儀礼を撮った「田の神」を催した。わが国の農村に残る信仰と生産、娯楽が一緒になった伝統的行事を「正月さま」「種蒔き祝い」「大田植」「虫送り」「新稻初と稻喰れ」「田の神講」「あえのこと」の7部構成で展示した。評論家の伊奈信男は「情緒に溺れることなく、民俗学と写真家の両方の立場から対象をはっきりと見据え、その核心的なものをドキュメントしている」(アサヒカメラ年鑑59年版)と評価。また民俗学者の柳田国男には「今まで写真は1枚で表現するものと思っていたが、行事を幾つにも分けて撮って、順番に並べるとその意味がよくわかるね」と褒められたと言ひ、氏は「断片的な写真を組写真化することで、時間や異なった面が汲み取れ、客観視することができる」と語る。(小著『写真家のコンタクト探検』平凡社 96年)

古くから祭りや民俗信仰、行事などを撮る写真家は数多い。が、民俗的な風習や暮らしにまで踏み込んで撮えた写真家は少ない。なかでも1921(大正10)年旧満州大連市で生まれた芳賀日出男は、39年单身で上京し、慶應義塾大学予科に入学、慶應カメラクラブに入会し、野島康三らの指導を受け木村伊兵衛や三木淳、船山克、長野重一などと交流を深める。41年文学部中国文学科の教授奥野信太郎の薰陶を受け、折口信夫から民俗学を学ぶ。戦後、日本通信社に入社。

この頃から民俗行事や芸能を生涯のテーマと定め、全国の村々を巡り精力的に撮影を始める。55年九学会連合の奄美諸島共同民俗調査に参加し、182日間に及ぶ民俗資料の撮影をする。平凡社発行、柳田国男監修の『総合日本民俗語彙』に民俗資料写真が掲載される。とくに日本人の生活文化の原型と言われる「稻作農民」の年中行事

を撮影し、58年個展「田の神」を開く。翌年『田の神・日本の稻作儀礼』(平凡社)を発行。63年秋田の「なまはげ」を、ウイーン大



収穫感謝祭の儀礼 田の神 あえのこと 1954年

学のヨーゼフ・クライナーと撮影。これがヨーロッパの民俗行事を撮るきっかけとなる。70年大阪万博の祭り広場のプロデューサーを務める。以後、毎年世界の祭りを撮りに海外へ。85年日本と世界の祭り民俗行事に関わるフォトライブラリーを開設する。各地で写真展と出版活動を続ける。97年稻作分祭 1982年

文化の集大成『日本の民俗』(上下2巻クレオ)を発行する。

1985年に開設された「芳賀日出男フォトライブラリー」は、わが国の民俗信仰から芸能の専門ライブラリーの先駆である。収蔵されている写真はカラーモノクロを含め約40万点以上の検索ができる。

お願い

あなたの写真原板(フィルム、乾板等)は大丈夫ですか?

現像済みのフィルムは支持体の性質上、時間が経過すると経年劣化が起こります。保管箱を開けて、酢酸臭がするようでしたら、ビネガーシンドロームが起こっています。

急いで、「写真保存センター」にお問い合わせください。

TEL: 03-3265-7451 又は 03-6272-4331



方相氏(ほうそうし) 京都平安神宮の節分祭 1982年



芳賀ライブラリーの画像検索画面 2016年(撮影/松本徳彦)

第41回 2016JPS 展開催

副会長 松本徳彦

日本写真家協会が東京都美術館でJPS展を開催したのは、1976年のことで、第1回展は会員のみの展示であった。翌77年の第2回展から一般公募を始め、今年で41回目になる。その足跡をたどってみると、77年の応募者は634名、1,804点であった。78年には446名、1,151点、79年602名、1,587点、80年707名、1,912点と多少の増減はあったが、2007年第32回展から、会場を恵比寿の東京都写真美術館に移した結果、応募者、点数ともに急激に増え、09年には応募者2,227名、7,350点と人気を博すまでになった。

会場が写真美術館ということもあって、関心が高まつたからでもあるが、それ以上に応募作品の内容が風景写真から街のスナップ、スポーツやステージ、ポートレート、ドキュメント、心象的なアート作品などとヤングアイ、18歳以下部門の若年層までの応募と幅広い分野の多彩で、質の高い作品が展示されることもあって、この種の展示としては多くのアマチュアの方々の関心を集めている。

展覧会場も東京展、関西展(京都)、名古屋展のほか、一時は福岡、札幌、宮城、新潟、広島など地方でも催したが、現在は東京、関西、名古屋での開催に定着している。

さて、2016JPS展は応募者2,015名、応募数6,717点でほぼ年年並みである。

高精細なデジタルカメラの普及に加え、プリンター性能の向上、多様な印画紙を選択することによって、写真表現技術のレベルアップに加え、プリントのクオリティーが良くなったことは喜ばしい。一方で、写真のデジタル化で「加工、合成、改変」などが容易に行えるようになり、写真本来のストレートな表現、瞬間美の追求といった、緊迫感が乏

しくなり、後処理(加工、合成、改変)で作りだされた写真が増えていることを憂う声も上がっている。

確かに表現の世界にその技術的手法や方法が論じられることには危惧感もあるが、余りにも安易に手を加える風潮には、どんなものかと言いたくなる。ともあれ、事物の発見、印象の固定、瞬間の描写といったイメージの追求をしていかないと、写真本来の直截的な事物の捕捉が失われることも考えておきたい。

最後になったが、今年も応募いただいた皆さん、後援、協賛いただいた各社の関係者の皆さんに感謝申し上げる。

応募者総数	2,015名	6,717枚
入賞・入選者数	285名	500枚
ヤングアイ参加数	14校	14枚



公募作品審査風景

撮影:天神木健一郎

審査員(左から)、宮澤正明、山口規子、熊切圭介(審査員長)、吉村和敏の各氏と佐々木広人「アサヒカメラ」編集長

東京展

東京都美術館／6月11日(土)～6月26日(日)
(ギャラリーB・C) 9:30～17:30 6月20日(月)休館
後援／文化庁、東京都、東京都写真美術館
表彰式／6月12日(日) 13:00～14:30
東京都美術館 ロビー階講堂
講演会／6月12日(日) 15:00～16:30
東京都美術館 ロビー階講堂
「ネット時代における写真のルールとマナー」
講師：間島英之(『アサヒカメラ』副編集長)、山口勝廣(JPS専務理事)
祝賀パーティー／6月12日(日) 17:00～19:00
東京都美術館2階レストラン「MUSEUM TERRACE」
協力(会場モニター提供)：パナソニック株式会社

名古屋展

愛知県美術館／7月5日(火)～7月10日(日)
(展示ギャラリーD室) 10:00～18:00
(金曜日20:00閉館、最終日17:00閉館)
後援／文化庁、愛知県、愛知県教育委員会、
名古屋市、名古屋市教育委員会
表彰式・講演会／7月9日(土)
愛知芸術文化センター12階アートスペースA
13:00～13:50 東海地区入選者紹介
14:00～15:30 講演会「どうして写真を撮るんだろう?」
講師：三澤武彦(JPS会員)
イベント／7月9日(土) 10:00～11:30
愛知芸術文化センター12階アートスペースA
「光をつくろう!スピードライト活用法」
講師：五木田友宏(JPS会員)

文部科学 大臣賞

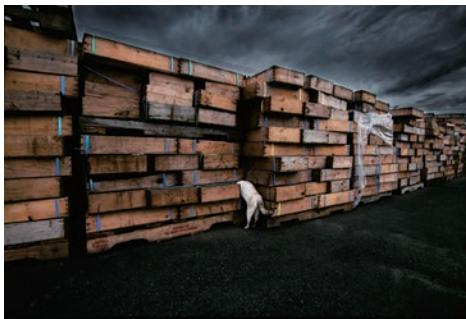
賞状・楯・副賞
賞金 50万円

土肥 美帆

(滋賀県)

「LIFE」

カラー 4枚組



東京都 知事賞

賞状・楯・副賞
賞金 30万円

常石 由美子 (滋賀県)

「生氣躍動」 カラー 単写真



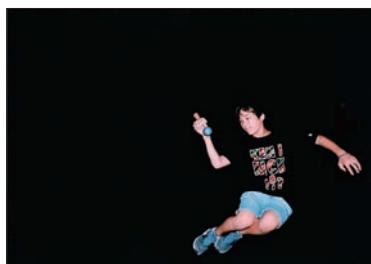
18歳以下部門

最優秀賞

金本 凜太朗 (広島県)

賞状・楯・副賞

「Pause!!!」 カラー 3枚組



関西展

京都市美術館別館／7月19日(火)～7月24日(日)

9:00～17:00

後援／文化庁、京都府、京都府教育委員会、

京都市、京都市教育委員会

表彰式・講演会／7月22日(金)

京都市国際交流会館イベントホール

13:00～14:30 関西地区入選者紹介と公募作品審査
講評、15:00～16:30 講演会「写真作りのよもやま
ばなし」講師：西岡伸太 (JPS会員)

イベント／7月18日(月・祝) みやこめっせB1 ウエルカム
ホール 10:00～16:00 「ゆかたDEフォトウォーク」
講師：柴田明蘭、西村仁見、クキモトノリコ (JPS会員)
協力：キヤノンマーケティングジャパン株式会社



金賞
賞状・楯・副賞
賞金 15万円

森 英夫 (三重県)
「残像残心」 モノクロ 3枚組



銀賞
賞状・楯・副賞
賞金 10万円

福井 憲男 (埼玉県)
「イーグルハンター」
カラー 3枚組



銀賞
賞状・楯・副賞
賞金 10万円

大林 幹彦 (京都府)
「雅の列—祇園祭」 カラー単写真



銅賞

賞状・楯・副賞
賞金5万円

関谷 智彦

(東京都)

「雪山の肖像」

モノクロ 4枚組

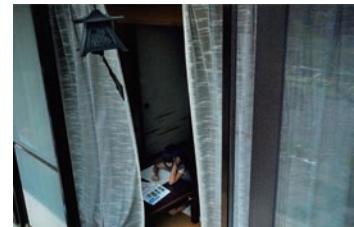


銅賞

賞状・楯・副賞
賞金5万円

仲澤 正男 (栃木県)

「夏休み」 カラー 4枚組



銅賞

賞状・楯・副賞
賞金5万円

土居 武司

(岡山県)

「風のいたずら」

カラー単写真



【ヤングアイ部門】

日本写真家協会

会長賞

賞状・楯・副賞

学校法人
日本写真映像
専門学校

タイトル
「記憶の防護」

堤 悠貴
林 利香
吉井脩人



ヤングアイ

奨励賞

賞状・楯・副賞

東京綜合写真専門学校

写真芸術第二学科

タイトル「Kaleidoscope」

井上雄輔、深川伶華



キタムラ

キタムラフォトブックに「ハードカバーレイフラット」が新登場

株式会社キタムラは、全国のカメラのキタムラ900店舗で、写真のテーマに合わせて多彩なバリエーションが選べるオリジナル商品「キタムラフォトブック」の製本タイプに「ハードカバーレイフラット」を新たに追加して発売いたします。

「キタムラフォトブック」は、写真が大きく残せるA4サイズと手軽なA5サイズのタテ・ヨコ・スクエアが選べ、かわいらしいポップなデザインから風景写真に合うような落ちていたデザインまで、さまざまな写真のテーマに合わせてつくることのできるフォトブックです。

これまでの紙の端を専用糊でとめる「無線綴じ」製本に加え、今回、見開きの中央部が平らになる製本形式の「ハードカバーレイフラット」を新たに発売します。本を開いた際に中央部が沈み込んだ構造で隠れないので、風景写真の中央部や集合写真の人物の顔が見えにくくならず、見開き写真が迫力ある仕上がりになります。また、表紙のハードカバーはに高級感があり、ウェディングアルバムや七五三、成人式の写真などに最適です。ご家族やご親族への贈り物にも喜ばれます。



(問い合わせ先)

株式会社キタムラ

管理部・販売促進部

広報担当 佐藤 卓

Takashi_Sato@mgw.kitamura.co.jp

携帯 070-5556-4819

〒 222-0033

神奈川県横浜市港北区新横浜2-4-1 新横浜WNビル

7F

<http://www.kitamura.jp>

クレヴィス

写真集『木村伊兵衛 パリ残像』
カラーで写し撮る1950年代のパリ

戦後間もない日本では海外渡航がきわめて難しく、芸術の都パリは遠い遙かな夢の世界でした。1954年(昭和29)、初めて念願のヨーロッパ取材が叶った木村伊兵衛は、ライカのカメラと開発されたばかりの国産カラーフィルムを手に渡仏。そこでアンリ・カルティエ=ブレッソンやロベール・ドアノーと出会い、生きたパリの街並みと下町の庶民のドラマを見る事ができました。木村作品のなかでもとりわけ異色なカラー表現されたパリ117点を収載。往時のパリの魅力が蘇ります。



カラーで写し撮る1950年代のパリ

『私のパリはやつれりと私の巴黎で、いつにいの時はどうだ。』
—撮影者にはこの時の政治、経済、社会など必ずしもいって
みえない、せいもあらざりが、来てはやがれたかった。何よも人間が大で気持がいい。
言葉が通じなくてもだに何かが通じたね。——木村伊兵衛著

〈構成〉

- I パリの街角
- II 素顔のパリっ子
- III 安らぐパリ
- IV 華やぐパリ

〈エッセイ収録〉

アンリ・カルティエ=ブレッソン、ロベール・ドアノー、木村伊兵衛、名取洋之助、野島康三、原弘、中島健蔵、田沼武能(掲載順)

定価: 本体 2,300円+税

サイズ: 25.7 × 18.6 × 2 cm 上製

ページ数: 194 頁 オールカラー

ISBN: 978-4-904845-62-2

全国書店、オンライン書店、Amazonにて販売中!

(問い合わせ先)

クレヴィス 担当:木村

TEL 03-6427-2806

E-mail info@crevis.jp

HP www.crevis.co.jp

ケンコー・トキナー

「ちょい足しできる広角ズーム」
トキナー AT-X 14-20 F2 PRO DX 好評発売中!

ケンコー・トキナーでは、2月よりトキナー広角ズームレンズ「AT-X 14-20 F2 PRO DX」(ニコン用・キヤノン用)を好評発売中です。この画角域では唯一の「開放F値がF2.0」のズームレンズで、絞り開放から性能を発揮できる新設計を採用。現在のAPS-Cフォーマット2,000万画素から3,000万画素のデジタル一眼レフに対応する、高解像の広角ズームレンズです。単焦点レンズと同等の性能を達成するため、非球面レンズ3枚を前群と後群に理想的に配置して、各収差を極力低減しています。

色収差を低減するために、SDガラス(FK01、FK03)を配置しており、開放F値2.0の明るいレンズで高解像を実現しています。

レンズの各収差を徹底的に除去することを目指し、最新の光学設計、最良の光学材料、高精度の加工技術を集積し、施しています。

フォーカス機構にトキナー伝統のワンタッチフォーカスクラッチを採用。ピントリングを手前に引くと、AFからMFに変更でき、暗い場所でも確実な操作が可能です。そのため、風景、夜景、天体等の撮影に大変便利です。

主なスペックは、フィルターサイズ82mm、最短撮影距離0.28m、最大径Φ89mm、全長106mm、重量735g対応マウントはニコン用、キヤノン用、メーカー希望小売価格は120,000円です。



(問い合わせ先)

株式会社ケンコー・トキナー

広報・宣伝課 田原 栄一

TEL 03-6840-2970

ファックス 03-6840-2962

e-mail etahara@kenko-tokina.co.jp

<http://www.tokina.co.jp>

シグマ

単焦点レベルの画質をカバーする中望遠ズーム登場

弊社は2016年4月に、1本で85mm F1.8、105mm F1.8、135mm 1.8相当(35mm判換算)の単焦点レンズ3本分以上の焦点域をカバーする中望遠ズームレンズ50-100mm F1.8 DC HSM | Artを発売しました。

高性能単焦点レンズと同等の明るさと解像力をもつ、最高レベルの光学性能と表現能力を発揮できるズームレンズを目指し、Artラインの開発指針に照らした挑戦の先駆けが、APS-Cサイズイメージセンサー搭載のデジタル一眼レフカメラ用として、世界で初めてズーム全域で開放F値1.8を実現したSIGMA 18-35mm F1.8 DC HSM | Artでした。そのコンセプトはそのままに、中望遠域をカバーする大口径中望遠ズームとして開発したのが、50-100mm F1.8 DC HSM | Artです。

FLDガラス、SLDガラス、高屈折率高分散ガラスなどの特殊レンズを各群に1枚以上採用しています。また、新設計の超音波モーターHSMの採用、インナーフォーカス・インナーズーム、ホールディング性と操作性を考慮した三脚座を採用するなど、快適な操作性も実現しています。



SIGMA 50-100mm F1.8 DC HSM | Art
発売中、希望小売価格(税別): 155,000円
対応マウント: シグマ用、キヤノン用、ニコン用

(問い合わせ先)

株式会社シグマ

担当: マーケティング部 桑山輝明

連絡先・電話: 044-989-7432

FAX: 044-989-7451

メールアドレス: pr@sigma-photo.co.jp

オフィシャルサイト:

http://www.sigma-global.com/jp/lenses/cas/product/art/a_50_100_18/

光村印刷

光村グラフィック・ギャラリー(MGG)
企画展
「黒田泰蔵 白磁／写真／造本／印刷」

白磁を創り続けてきた黒田泰蔵氏の初めての自選作品集『黒田泰蔵 白磁 TAIZO KURODA white porcelain』が昨年2月に上梓されました。全126作品が掲載されている本作品集の写真撮影は大輪眞之氏によるもので、自然光の中、モノクロームネガフィルムを使って印画紙に焼き付け仕上げするアナログ方式が採用されました。この白磁作品と銀塩写真の階調を活かし、いかに本という形に定着させるかという点において、デザイナーの木下勝弘氏が造本設計とアートディレクションを、光村印刷がモノクロ画像を3版に分けるトリプルトーンでの製版・印刷を担当しています。

本展はこの作品集を構成する白磁／写真／印刷／造本というパースにはほどき、様々な試行錯誤や検証を重ねながら、ディテールの吟味を尽くした一冊ができるまでのプロセスを、印刷からのアプローチを中心に、白磁・写真の実作品とともに展観します。



・会期: 7月8日(金)~8月7日(日)予定
会期中無休

・会場: 光村グラフィック・ギャラリー(MGG)

東京都品川区大崎 1-15-9

・開館時間: 午前10時~午後6時

・入場無料

(問い合わせ先)

・TEL 03-3492-1181(光村印刷代表)

・FAX 03-3492-4990

担当: 両角・和田

<http://www.mitsumura.co.jp/>

リコーイメージング

これがPENTAXのフルサイズ!
デジタル一眼レフカメラ
「PENTAX K-1」

リコーイメージング株式会社は、35ミリ判フィルムと同等サイズの大型CMOSイメージセンサーを搭載したKシリーズ最高級デジタル一眼レフカメラ「PENTAX K-1」を発売しました。



「PENTAX K-1」は、35.9mm × 24.0mmのCMOSイメージセンサーを採用し、超高精細な約3640万画素の有効画素数と独自の画像処理技術により、階調再現性や高感度性能に優れた極めて高画質な画像を実現しています。また、新たに5軸方向に対応し、5段の手ぶれ補正効果やピクセル単位の動作制御で超高解像撮影が可能な新手ぶれ補正機構、人工知能技術を応用した的確な露出制御機能など、最新のテクノロジーを採用しています。さらに、レンズの光軸から外れることなく上下左右に向きを変更できるフレキシブルチルト式液晶モニターや、暗所でのレンズ交換や各種設定に便利な「操作部アシストライト」機能、約100%の視野率を実現した光学ファインダーなど、随所にペンタックスならではの独創的で実用性の高い機能・性能を盛り込んでいます。

(問い合わせ先)

株式会社リコーイメージング(株)

VR事業室 DC グループ

担当: 川内 拓

〒143-8555

東京都大田区中馬込1-3-6 リコー大森事業所内

TEL 03-3777-4250 FAX 03-3775-8555

<http://www.ricoh-imaging.co.jp/japan/products/k-1/>

(各社からお送りいただいた原稿をそのまま掲載しました。構成/出版広報委員: 伏見行介)

日本写真家協会創立 65 周年記念事業 「日本の海岸線をゆく—日本人と海の文化」東京展終了

去る 3 月 13 日、東京芸術劇場での同月 1 日からの 13 日間の会期を終えて、日本写真家協会創立 65 周年記念「日本の海岸線をゆく—日本人と海の文化」東京展が盛況の内に閉幕した。入場者数は 4,252 人であった。東京都写真美術館で開催した 60 周年記念「おんなー立ち止まらない女性たち」展の、1 万人を超える入場者数には及ばなかったものの、写真展会場としては知名度が低く、地の利に弱みを感じさせた、池袋の東京芸術劇場での数字としては健闘したといって良いであろう。因みに会場を同じくした、知名度の高い「世界報道写真展 2015」の一日平均入場者数は約 450 人、「森山大道」展は約 180 人であり、「日本の海岸線をゆく」展は約 330 人であった。

展覧会のイベントについては、まず開幕前夜に内覧会を開催した。主にマスコミ・出版関係者を中心に、協賛社、賛助会員など、約 100 名の参加者で賑わった。開幕後、会期中の最初の土曜日、5 日には椎名誠氏の講演会を写真展会場と同じフロアのシンフォニースペースで開催した。定員 100 名の会場は椎名氏の熱心なファンを中心に満員となり、幕張の海辺での少年時代の思い出などを交え、独特的語り口で満員の聴衆を魅了した。講演後には写真展会場に場所を移し、著書と写真集のサイン即売会も行い、大変盛況であった。また、翌日の日曜と翌週の土日には出展者による写真集のサイン即売会を行った。熊切会長、松本副会長、林義勝、平寿夫、清水哲朗、秦達夫、齋藤亮一の各氏に、実行委員の小池良幸、渡辺英明、井田宗秀、島田も随時加わり、写真集の売上げに大いに貢献した。

同様に写真集の売上げに良好な影響があることが分かったのがフロアアレクチャーアーであった。5 年前の大震

災と関係の深い東北ブロックの作品を中心にレクチャーを行ったが、キャプションには書ききれない各作品や作家のエピソードは多くの来場者の心に響いたようだ。作品や作家への関心や共感は、写真集購入の動機を後押ししてくれたようであり、当初の予定を大幅に増やし、サイン会の直前に行うことで相乗効果を計り、およそ 10 回ほど開催し好評であった。

写真集の売上げは約 300 冊で、入場者の約 7 % が購入したということになるが、前述した「おんな」展では、この数字は約 4.5 % であったことからも、今回の健闘ぶりがうかがえる。

来場者の声や様子、アンケートからも、この健闘ぶりは伝わってきた。全体の感想では「とても良かった」、「良かった」という声はもちろんのこと、「感動した」と書き込んでくれる方が多かった。鑑賞時間も長めで、平均で 1 時間程度、それ以上かけてじっくりと鑑賞する来場者が多く、さらに、キャプションをじっくりと読み、メモをとる姿が多かったのも印象的であった。また、一般の方はもちろん「大変興味があった」という写真家の評価が多かったことも特徴的であった。また、海外の来場者からは「日本のことがとても良く分かって素晴らしい」という声もあり、サブタイトルの「日本人と海の文化」に相応しい展示になったのではないかと思う。

今後、同写真展は関西、横浜と国内で巡回の予定である。是非とも多くの方にご覧いただきたい。会員諸氏、賛助会員のみなさまには感謝申し上げるとともに、更なるご協力をお願いいたしたい。

(記／実行委員長 島田 聰、撮影／小池良幸)



内覧会オープンに向け、準備の整った会場入り口（2月 29 日）



内覧会来場者を前に、熊切会長のオープニング挨拶（2月 29 日）



満員御礼となった椎名誠氏の講演会（3月5日）

◆巡回展

関西展：2016年6月14日（火）～19日（日）

9時～17時

京都市美術館本館南2F 会期中休館日無し

<関西展イベント>

パネルトーク「日本の海岸線をゆく－出展作家に聞く作品はこう撮った」

6月14日（火）14時～

ロームシアター（旧京都会館）B2F ノースホール
サイン会

6月14日（火）11時半、18日（土）11時半、
19日（日）11時半

プロアレクチャー

6月14日（火）11時、18日（土）11時・14時、
19日（日）11時・14時

トンガ王国展：2016年9月9日（金）～22日（木）

（国際交流基金共催）

横浜展：2017年4月～6月予定 日本新聞博物館

◆写真集

『日本の海岸線をゆく－日本人と海の文化』

寄稿 椎名誠 平凡社刊 B5判変型 オールカラー

204頁 定価3,200円（税抜き）



出展作家による写真集サイン即売会を開催（3月13日）



島田聰実行委員長によるプロアレクチャーには、多くの来場者が足を止めてくれた（3月13日）



東日本大震災特集を展示するギャラリー2で、5年目の地震発生時間に黙祷する入場者と会場スタッフ（3月11日 PM2:46）



熱心にアンケートに記入する来場者（3月13日）



多くの来場者で賑わう展示会場 ギャラリー1（3月13日）

着実な流れを感じさせる最近のモノクロ潮流を探る！

写真といえば一般的にカラーだが、最近モノクロームを巡る動きが活発だ。

白から黒へのモノトーンで懐かしさや優しさを表したり、粒状感で力強さを表現するなど、色に依存できない代わりに見る側の想像力が掻き立てられるあたりが人気の秘密だろうか。

■きっかけは高価なモノクロ専用機の登場

モノクロフィルムやモノクロ用印画紙は一部のハイアマチュアやプロが利用するのが大半で、残念ながら、かつての人気銘柄も続々と姿を消している。

デジタルカメラでは色調選択の一項目として、カラー画像の彩度を抑えたモノクロモードが搭載された機種が大半。エフェクト機能の一部として、モノクロベースのメニューが搭載された製品も各社から登場しているが、お楽しみ程度でモノクロームファンが本格的に樂しむには物足りなさを感じていたのは確かだ。

そんななか、大きく潮目が変わったのが
2012年春。

ドイツ・ライカ社より、モノクロ撮影専用撮像素子を搭載した「ライカ M モノクローム」が登場。デジタルカメラでありながら、モノクロ専用機というは孤高の老舗ブランドだからこそ実現したコンセプトだが、90万円というプライスも手伝って話題をさらった。その後はライブビューなどを可能とした後継機、ライカ M モノクローム(Typ246)へと



ライカ M モノクローム (Typ246)

シャッターチャンバーで販売中だ。

■デジタル時代の新しい潮流

これに触発されたのか定かでないが、国産勢は今春登場モデルから、急に賑やかさを増してきた。

富士フィルムはFinePixシリーズの高級機、X-PRO2の色調選択機能、フィルムシミュレーションに、フィルム銘柄のネーミングをつ

けたACROS(アクロス)モードを新設。これまでPROVIA(プロビア)やVelvia(ベルビア)など、フィルム銘柄をモチーフに色調選択を展開していたが、美しい階調と超微粒子で定評のあるACROSモードの採用でさらに表現の幅が広まった。またフィルムではレンズ前に取り付けた赤や黄色などの黑白用フィルター効果も再



オリンパス PEN-F「周辺減光-5」



オリンパス PEN-F 周辺減光なし



富士フィルム FinePix シリーズの高級機、X-PRO2



オリンパス PEN-F はクラシックカメラ風の風貌



Panasonic の LUMIX GX7MarkII

現。手軽にフィルター効果が楽しめるのもデジタルならではだ。

一方、オリンパスはクラシックカメラ風の PEN-F に、モノクロプロファイルコントロール機能を新採用。これまでアートフィルターと呼ぶエフェクト機能に粒状性とコントラストを高めた「ラフモノクローム」を採用していたが、モノクローム専用プロファイルの搭載で、一歩踏み込んだ階調や粒状性、周辺減光などを好みに応じて調整できるようになった。なお純正現像ソフト「オリンパスビューアー3」では、RAW データからも同様の効果を作成できる。

パナソニックは從来からエフェクト機能にダイナミックモノクローム、ラフモノクローム、シルキーモノクロームと比較的多くのバリエーションを搭載し、誰もが簡単にモノクローム撮影が楽しめるよう展開していたが、LUMIX GX7MarkII より、フォトスタイルと呼ばれる色調選択の中に「L. モノクローム」を新設。通常のモノクロームモードに比べて、黒を引き締め、中間調からハイライト側の階調を豊かにしているのが特徴だ。

■元祖フィルムの世界にも新たな動き

元祖フィルムも人気銘柄がフェードアウトしていくなか、サイバーグラフィックス社からオリエンタルブランドの白黒フィルム、ニューシーガル 100 & 400 が登場。同社はモノクロ大手のイルフォードの輸入代理店も手がけ、DELTA などイルフォードブランドの白黒フィルムも扱っているが、



オリエンタル ニューシーガル 100 & 400



LUMIX GX7MarkII 色調選択「L. モノクローム」

より親しみやすい入門用として、ニューシーガルの取り扱いを始めた。聞くところによると、最近ではデジタルカメラとフィルムカメラを併用する女性ユーザーも増えつつあり、人気上々のこと。イギリス生産の輸入品だが、あえてパッケージには日本語表記での説明文を入れて敷居を低くし、価格も抑えている。

■現像ソフトで楽しむモノクロ表現

ほかにもシグマの純正現像ソフトの「SIGMA Photo Pro」では、RAW データからモノクロ画像を作成。同社オリジナルのユニークな三層構造のフォビオンセンサーにより、高解像で階調豊かな画像が得られるほか、画像調整で粒状の大きさや密度まで変えられるなど、かなりマニアックな楽しみ方ができる。dp quattro シリーズをはじめとするカメラもコンセプトも、ややクセのある製品だけに、撮影から後処理を含めて楽しんでもらうのが狙いのようだ。

ざつと最近のモノクロ潮流について紹介したが、各社各様に「モノクローム」を楽しんでもらおうと創意工夫しているのがわかる。デジタルカメラ登場以降、画像のきめ細かさを表す画素数や超高感度画質などで各社デットヒートを繰り広げてきたが、それらも一般的な使用では十分に満足行くものになりつつある。

ようやく、ゆっくり「味」を楽しむ領域へと進化した証かもしれない。

(記／出版広報委員：桃井一至)



シグマの純正現像ソフト「SIGMA Photo Pro」

平成 28 年度（第 17 回） 公益社団法人日本写真家協会定時会員総会報告

日 時：平成 28 年 5 月 27 日（金）、15 時～16 時 30 分
場 所：御茶ノ水・ソラシティカンファレンスセンター
2F ソラシティホール「West」
総正会員数：1,596 名、定足数：799 名
出席正会員数：971 名（内訳・本人出席 128 名、代理委任 2 名、
議決権行使書 841 名）
定刻、進行の足立総務理事から平成 27 年度の正会員物故者 12 名と名誉会員物故者 4 名の氏名が読み上げられ、黙祷し冥福を祈る。続いて 28 年度の新入会員 52 名が紹介された。



次いで、出席の名誉会員 3 名と会員外理事 5 名、監事 2 名を、さらに出席の正会員理事 11 名を紹介した。

会長より「公益社団法人 6 年目の総会開催となり、昨年 5 月の定時総会で新理事が決定し、会長交代となって私、熊切圭介が 6 代目の会長に就任して 27 年度の事業を実施して参りました。協会は、昨年創立 65 周年を迎える今年 66 年目です。約 1600 名の会員を有する職能団体として発展し、今後も事業活動等の一層の発展に尽力したいと思います。」と挨拶があった。

定款により議長を熊切会長が務め、定足数を超える正会員が出席していると報告され会議に入った。

【決議事項】

第 1 号議案：「平成 27 年度事業報告及び決算承認の件」は、松本副会長が公益事業と収益事業その他共益事業について説明。山口専務理事が貸借対照表と正味財産増減計算書をもとに、当期の収益は 153,503,149 円、費用は 154,004,849 円で、当期は 501,700 円の赤字となった。当期の赤字である約 50 万円の金額は総収益額の 0.3% で適正水準であると説明した。続いて、監事の北村行夫弁護士が監査報告書について、監査概要、意見を述べた。

その後、議長が質問・意見を求めたところ、渡部晋也正会員から「昨年の理事候補の中に会費を下げる公約をされたことに対して理事会はどう対処されたのか、また、写真学習プログラムの報告で年 50 校の計画に対して実施が 39 校だったのは」との質問があり、会費について山口専務理事より「現在の事業規模に対して会費の値下げは難しい」と返答し、写真学習プログラムについては足立常務理事より、「会員へアプローチする時間が少なかった」と回答した。さらに渡部正会員から「参加会員との情報交換会を開いてほしい」との要望があった。以上の質疑応答ののち、議長が第 1 号議案について、承認を諮ったところ異議なく、賛成絶対多数で原案通り可決承認された。

【報告事項】

続いて報告事項に入り、議長より「平成 28 年度の事業計画、収支予算書及び資金調達及び設備投資の見込みを記載した書類は、定款第 34 条に基づき、3 月 7 日の第 35 回理事会で承認し、3 月 28 日内閣府に提出した」と報告された。

報告事項 1：「平成 28 年度事業計画書」並びに 2：「平成 28 年度予算書」について、第 35 回理事会決議に基づいて報告した。

公益事業 1～6 については「ほぼ昨年と同様の事業を継続する。周年事業『日本の海岸線を行く』は、6 月の京都展と国際交流基金の協力によるトンガ王国展を 9 月に計画している」と松本副会長より報告があった。収支予算書については、山口専務より正味財産増減計算書ベースによる「収支予算書」を基に以下の報告があった。今年度は特別な事業もないが、経費の削減と省力化を進めていくとの説明があった。

報告事項 3：「公益社団法人日本写真家協会細則」一部変更の件について、山口専務理事より今回細則第 18 条の変更により、正会員理事 11 名を選挙で、正会員理事 2 名を理事会推薦で、正会員以外の理事 7 名を合わせた理事選出者 20 名を総会で選任する事になるとの説明があった。

報告事項 4：第 42 回「日本写真家協会賞」について、松本副会長が「高柳昇氏（株式会社東京印書館、統括プリンティングディレクター）に贈る」と報告した。

報告事項 5：会費滞納による正会員資格の喪失の件は、足立常務理事が「平成 27 年度の会費滞納者 12 名について、第 36 回理事会で正会員資格の喪失者として承認しており、当総会終了後に手続きを行う」と報告した。

その他の事項として、松本副会長より「笹本恒子名誉会員からの要望の件」について「笹本恒子名誉会員から JPS に個人資産から 800 万円を寄贈し、記念に若い写真家を育成するための『笹本恒子写真賞』を創設を要望との申し出があったので理事会で検討した。理事会は、笹本恒子名誉会員からの要望である金銭の收受及び賞の創設について承認した。今後実施方法について検討し、早急に実施したい」との報告があった。

以上の報告の後、議長が質問・意見を求めたところ、伏見行介正会員から「写真学習プログラムはフィルムで実施しているが、特別な意味合いがあってのものなのか」との質問があり、「フィルムは写真の基本であること、写真のルーツや限られた枚数で撮影する事の大切さを知ってもらいたいため」と足立常務理事が回答した。

以上で議事は終了した。足立常務理事から総会出席の賛助会員の紹介があり、従来の団体所得補償保険に代わる新たな保険制度の説明と引受保険会社、代理店の紹介を山口専務理事が行い総会の幕を閉じた。

総会終了後、同会場にて、17 時 30 分より懇親会が行われた。

司会は総務の小川委員長が行い、熊切会長の挨拶に続き、会員外理事で賛助会員の凸版印刷㈱足立直樹代表取締役会長から「印刷技術は芸術であるという先代社長の言葉を基に歩んできた。印刷



という技術が新しい情報コミュニケーションの一環として、これから日本の芸術、文化を皆様と共に支えていく

ればと思っています」との挨拶と、乾杯のご発声をいただき懇親会がスタートした。

和やか雰囲気の中、多数の参加があった新入会員の自己紹介や賛助会員の方々の挨拶もあり、会員同士の会話の和が広がり会場は盛り上がった。最後は、松本副会長の閉会の挨拶と木村恵一名誉会員による三本締めで終了した。

（記／小池良幸、撮影／小野吉彦）

Message Board

◆宇苗 满 (2006年入会)

現在、ブナは日本最北とされる北海道黒松内町の歌才ブナ自生北限地帯、青森・秋田県の白神山地、そして本州中部では人里離れた山間部に点在しており、日常生活の場ではほとんど見ることが出来ない希少植物となってしまいました。ところが奥尻島では面積の70%以上が森林で、その大半がブナの天然林・原生林に覆われ、山間部から海岸部にかけて分布する密度は、日本海を挟んだ白神山地の飛地のようだと言われています。

このブナ林で、雪が解け始める3月下旬～4月上旬に芽を覗かせる山菜がキトビロ（別名：ギョウジャニンニク・アイヌネギ）です。奥尻島で近年収穫されるキトビロは、私が子供の頃、ジンギスカン鍋に入れて食べたものと比べると随分匂いが和らいだように感じます。ネットで検索すると「匂いのしない奥尻島のキトビロ」と有名になっていました。

このキトビロの効果・効能は、血液サラサラ、動脈硬化予防、高血圧・低血圧予防、抗発ガン作用、内臓脂肪燃焼効果・ダイエット、など数えたら切りがありません。来春のキトビロ収穫時期に「秘境ブナの浮島」の撮影旅行はいかがでしょうか。旅館・民宿で食べるキトビロのジンギスカン炒め、豚バラ巻き、ギョウザ、卵とじ、バター炒め、天ぷら、酢味噌あえ、などは絶品です。

（北海道奥尻町在住）



う」の祝電が届きました。当日出席できなかった東京在住の長女からは「お父の生存葬だね…」とメールが入ってきました。全く同感です。娘からは何を言われても許せます（笑）。

写真集の巻頭文は田沼武能（前）会長から「人に歴史あり」に始まり「輝ける写真人生50年」と、お褒めいただき「80年に向け挑戦してほしい」とエールをいただきました。この事は1982年（34歳）にJPSに入会、先輩や多くの友との出会いがあったからです。不肖上山から「何を教わったのか？・何を教えたのか？」新潟デザイン専門学校写真科・上山ゼミのOB生徒達は写真に何かが繋がったと感じました。出版パーティー当日は68歳の誕生日でした。

（新潟県新潟市在住）

◆上山益男 (1982年入会)

専門出版社から約10年ぶりに第二弾『上山益男・写真人生50年写真集』を自費出版することが出来ました。これだけのものかと物足りなさも感じますが、今の在り方を自らに問いただすためです。出版パーティーも開催させていただきました。カメラ小僧のアマチュア時代の恩師、川代武三さん（盛岡市）からは「写真バカおめでと」



上山益男 写真人生50年写真集出版を祝う会

◆小橋健一 (1979年入会)

昨年10月に写真集『橋の探見録-5』を出版した。今回の写真集を最初に取り上げて貰ったのが東京新聞で、しかも記事は都内通し版であった。これで手応えがあればいいな！などと感じていた矢先、FMえどがわからお声が掛かってきた。放送日を大晦日の午後5時から30分番組を予定していると具体的だった。音声イメージで写真集を紹介するのも面白いと取材に応じた。

一度あの大きな金魚鉢のようなボックスに入ってトークをして見たいと思っていた矢先だから不思議だ。ガンを掛ければ願いは叶うと、情報は自ら発信しなければと強く実感したところです。写真はFMえどがわのスタジオにて。（東京都江戸川区在住）



◆西山治朗 (1975年入会)

ことし、7度目の干支年を迎えました。まだ五味五感は確かだと自認つつも、やはり五臓六腑は日々衰微。これは人生の傲い。そこで、私からの提議を端的に記述します。

JPS年間会費の減額案です。会員歴40年以上、年齢80歳到達の条件で減額50%が主内容です。まことに「高齢者」への世情からの風当たりは物価高騰、年金の実質的な目減りと消費増税など如何とも致し難いです。ご賢察、ご検討を願う次第。合掌

（京都府日向市在住）

◆南川 三治郎 (1972年入会)

2014年5月、三重県総合博物館MieMuにて展示した「日本の心 第62回神宮式年遷宮」展はその後、山形県白鷹町文化交流センター あゆーむ、ケルン日本文化会館、ローマ日本文化会館、ニューヨーク総領事館ギャラリー、ロサンゼルスJACC 日米文化会館を巡回し、この度伊勢の「賓日館」での里帰り展が実現しました。



（東京都渋谷区在住）

◆大谷英之 (1963年入会)

今年も2月15日～25日、日出生台にて米軍の実弾射撃訓練が実施されわが家の窓ガラスを揺らす。1月29日～2月29日、JR由布院駅アートホール開館25周年にあたり、由布院町出身者の多岐にわたる芸術作品の展示会を開催。私はアレン・ネルソン氏のポートレートを展示。1947年ニューヨーク・ブルックリン生まれ、1996年アメリカ海兵隊員としてベトナム戦争の前戦に。帰国後戦争による精神的後遺症に苦しんだが立ち直った後、自身の戦争での体験・戦争の現実を訴え講演活動を続け、日本国憲法“9条は宝だ”と訴え続けたが、2009年3月枯葉剤の影響と思われる病気により逝去。合掌

（大分県由布市在住）

◆吉野雄輔 (2001年入会)

6月に福音館書店から『海のなかのぞいた』という伊豆のタイドプールが舞台の本が出版されます。お父さんには息子を磯場に連れて行き、小さな潮溜まりだけど、そこには、いろいろな生きものがたくさん住んでいて、大きな海とつながっているんだよ！と海の世界をみせてくれるお話です。お父さんと息子、父親の威厳が薄れている時代、やっぱりお父さんって、すごい～！

海のなかのぞいた



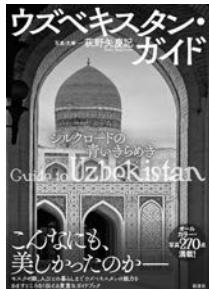
よしの ゆうすけ さく

って単純に思ってもらえる、そして子供には想像の翼を広げて欲しいと。。。 （東京都世田谷区在住）

◆萩野矢 慶記 (1986年入会)

シルクロードの青いきらめき『ウズベキスタン・ガイド』(彩流社)を出版しました。シルクロードの要所として栄えた中央アジアの最大国家ウズベキスタンは、東西の文化が交差し、宗教、文化、建築学的にも独特の魅力があり、世界遺産も多い。仏教遺跡の宝庫でアフガニスタンとの国境の都市テルメズや古代王国の遺跡群が注目を集め自治国のかラカルパクスタンなどを加え、初めてウズベキスタン全土を網羅的に紹介。ガイドブックとして類書がなく、貴重な情報源です。

(東京都足立区在住)



◆叶 悠眞 (2016年入会)

故郷「くまもと」が壊れました。4月14日・16日、熊本を二度の巨大地震(震度7)が襲い県民のシンボル「熊本城」が崩落。16日朝、航空会社と交渉し18日対地からの高度1200mでの制限付きで撮影を実施しました。巨大地震は、故郷の家々、道路、橋、田畠をづたづたに破壊していました。涙を流しながらの撮影は終わりました。



今後、定期的に故郷「熊本」入りし「熊本地震」を上空から発信してまいります。「助けてはいよ！くまもとを」。

(東京都足立区在住)

◆上岡弘和 (2016年入会)

新天地への移設で話題となっている東京都中央区の築地市場、そのすぐ側に、勝鬨(かちどき)橋があります。会員のみなさまの中には、この橋の中央部がハの字に開くシーンを憶えているかたもいるかもしれません。ただ残念なことに、交通事情の変化により、今は固定され、動かない普通の橋として45年が経過しています。

この橋を再び可動橋として、現役復帰できないかと、長年活動している「勝鬨橋をあげる会」では、撮影者不明の記録写真を所有しています。昭和45年11月29日に撮影された、最後の跳開時の写真です。素晴らしい写真なのですが撮影者の手がかりがありません。詳細は、勝鬨橋をあげる会のHPに

掲載しています。新入会員がいきなり人探しで恐縮ですが、当時の情報であれば何でも、お寄せ頂けると幸いです。どうぞよろしくお願ひいたします。

(東京都小平市在住)

◆中村武弘 (2011年入会)

5月18日～28日の期間で、初の個展「小笠原への旅 A trip to Ogasawara」をEIZOガレリア銀座にて開催。作品プリント24点、4Kモニター5台によるスライドショー58点で、海を中心とした小笠原の自然の作品展示を行った。「小笠原に行きたくなつた」などのお声を頂き、小笠原の自然の素晴らしさを伝えられたことを嬉しく思う。また、船で丸一日かかる交通手段の不便さにより、観光客数が制限されているからこそ守られている自然であること、自然は守らなければ壊れてしまうというメッセージも来場者を感じて頂けたことと

思う。今後も活動を通じて、ゴミを捨てない、ルールを守るという当たり前のことと自然は守れること、些細な心無い行動で自然は簡単に壊れること、そして、自然が壊れればその悪影響は人間生活に現れることをより多くの方に知って頂きたい。

(東京都世田谷区在住)



◆永野一晃 (1981年入会)

京田辺市から陶芸の町、信楽に抜ける国道307号を少し走ると宇治田原町に outs。この町には大規模な茶園が数ヶ所あり、四季を通してよく行くところです。茶摘みが終わると秋までは茶畠も手入れの季節、晩秋のころになると茶畠周辺に植えられた柿の実がたわわに実り、茶畠の緑との対比が奇麗になります。11月中旬には田圃のあちこちに柿棚が作られて古老柿作りも始まります。



軽に車で出かけられ、人も少ないお気

に入りの撮影場所を紹介します。

(京都府八幡市在住)

◆マツシマスム (1983年入会)

琵琶湖をテーマに52年プロの写真家に憧れて九州の長崎を出て52年になる。写真を学ぶ為であった。東京と大阪のどちらを選択する

かで迷った末、写真クラブの活躍が盛んな大阪を選んだが、今になって思うと大阪を選んで正解だった。琵琶湖との出会いが私の写真人生を決定的にしたからである。

琵琶湖との出会いは、クラブの先輩と湖北や余呉湖の撮影に同道したのが最初だった。当時の余呉などは2メートルを超える積雪で、白雪に覆われた湖北の風景にすっかり魅了された。当時、世間では土門拳や入江泰吉の仏像や神社、大和の風景に人気があり、私もチャレンジしたのだがさっぱりだった。

昨今は琵琶湖周辺の町並みや湖岸の道路もすっかり変わり、道路なども整備され生活環境は著しく便利になったそうだが、湖岸の「さざなみ街道」は観光客の車で土日は渋滞で大変だとか。時代の流れとはいえ、かつての美しい湖岸や夕陽に映える湖面の美しさが懐かしい。(大阪府寝屋川市在住)

◆大山 謙一郎 (1998年入会)

今回の熊本地震の震源地、益城町から20kmぐらいの町、山都町が私の故郷であります。発生の前日、14日に熊本、天草で牛深ハイヤ踊りを写す仕事があり、出発の準備をして寝入ってしばらくして、地震発生を聞き、飛行機、新幹線とあらゆる手段をさがすもダメ…踊りも中止になってしまった。ニュースを見れば、そのスケールの大きさに驚愕、自分の実家はどうなったんだろう？管理人の外観は変わらないという連絡でホッと一息、しかし内部は玩具箱をひっくり返したという言葉の通り、写真集、ポジフィルム、写真のプリント…震度5強で揺さ振られ、かくのごとであります。



発生から一週間後にわが家に入りましたが、その姿たるや筆舌につくし難い。少し落ち着くと、どうしても震源地を写したい気持ちは押さえきれず、益城町、西原村を撮影したのは次の日のことであった！地球の摩訶不思議は、我々凡人には計り知れないとてつもなく大きい事を感じたしだい！

(東京都板橋区在住)

前号『会報161号』の「メッセージボード」(P49)にて、野田知明会員と今井孝弘会員の投稿写真が入れ替わってしまいました。訂正するとともにお詫び申し上げます。

セミナー研究会レポート

◆CP+2016特別展示報告◆

ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾 被爆から70年
併設：小学生がとらえた—わたしが見つけた世界

日本写真保存センターの活動

平成28年2月25日（木）～28日（日）
みなとみらいギャラリー

カメラ映像機器工業会が主催するCP+2016がパシフィコ横浜で催され、その協賛企画として特別展示を行った。4日間の入場者は5,120人。

ギャラリーAでは、昨年8月JCIIフォトサロンで行った「ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾 被爆から70年」のアンコール展が催され、連日多くの入場者が被爆直後を捉えたヒロシマの松



重美人や、ナガサキを撮影した山端庸介らの原爆被災写真を、「これが原爆直後の凄惨な状況を捉えた写真なのか」と、原爆の恐怖、痛ましさに目を凝らして見る姿が印象的であった。

ギャラリーBでは、写真学習プログラム実施11年目、児童たちが捉えた約300点の写真を興味深く観察し、キャプションを読み、児童たちの観察眼の鋭さ、大人とは違った視点による写真の新鮮な表現に感動する姿が散見された。

ギャラリーCでは、写真原板を収集・整理し、長期保存対策を施して収蔵する様子をパネル展示し、写真原板の保存の必要性と利活用に向けてアーカイブの構築を図っている現況にも、多くの関心が集まっていた。

◆CP+2016JPS講演会報告◆

肖像権こんなときどうする

平成28年2月27日（土）

パシフィコ横浜・会議センター301～302

講師：松本徳彦（JPS副会長）

アマチュアの方にとって関心の高いのが「肖像権」である。最近とくに問題となっているのが、スマートフォンやタブレットによる撮影。イベントなどがあると、一眼レフを押しのけて最前列で撮りまくるといった現象が起こっている。それによるトラブル



やマナーの悪さが指摘されている。

こうした事例を紹介しながら、どうすれば心地よく撮れるかを分かりやすく解説していた。「撮る」行為か、「撮らせてもらっている」といった謙虚な姿勢の大切さ。「ありがとう」の一言で、撮り手と被写体との関係が和む方法など、極意が語られた。『スナップ写真のルールとマナー』、新版『写真著作権第2版』の販売本にも列ができていた。（記・撮影／足立 寛）

◆page2016オープンイベント・JPSセミナー報告◆

写真原板のデジタルアーカイブの現在

平成28年2月3日（水）

池袋サンシャイン文化会館 参加者：90名

page2016オープンイベントとしてJPS主催「写真原板のデジタルアーカイブの現在」と題したセミナーを開催した。

日本写真保存センターでは写真原板の収集と保存を行っている。写真原板のデータベースの構築について、凸版印刷とキヤノンSSの担当者から詳細を語っていただいた。「写真原板のデータベースについて」 笛木 論（日本写真保存センター）



「日本写真保存センター」が行っている写真原板の収集と保存では、デジタルスキャンをして、管理と利活用に向けたデータベースを構築している。

・写真原板は長期保存に適した中性紙に包み、摺氏10度、湿度40%以下の環境を維持している東京国立近代美術館相模原フィルム保存庫で収蔵。

・原板は撮影時の流れがわかるようにコンタクトシート状のスキャンを行い、デジタルベース化している。

・画像は800dpiでスキャンし、利用状況に合わせて精細なスキャンを行う。

・データは管理用と閲覧用に分け、閲覧用は低解像度にし、web上で閲覧できるようにリサイズを行う。

「SAI-CHIによる写真原板データベース」 奥平正幸（凸版印刷株式会社）

・「写真保存センター」がSAI-CHIを活用することは、他館との相互閲覧や検索が可能となる。

各館に情報がなくても連携することにより、全国の美術館、博物館等の所蔵写真など膨大なデータベースと連携することで、有効価値が生まれる。

・今まで写真のデータベースがなく、詳細な情報を得ることが困難であったが、将来的には大きな可能性を秘めている。

「データベース構築に関するノウハウ」 大塚健太（キヤノ

ン S & S 株式会社)

・大容量化しているデータの保存方法としては、ハードディスク(HDD)、クラウドなどの方法があるが、一般的にはハードディスク(近年は容量が大きくて低価格)が使われている。ただし物理的にHDDはクラッシュの危険もあるし、データ消失の危険があるので、データは常にバックアップすることを勧める。

・キヤノンが推奨するデータの保存方法についての問題提起があった。バックアップであっても電気的ショック落雷やショート、ウイルス等によるデータ消失の可能性は捨てきれない。セキュリティルーター等を介在させる方法を勧める。

・インターフェイスの転送速度を上げるにはUSB3.0を使いインターネットに繋ぐ場合にはLANケーブルのカテゴリー5e以上を勧める。

ほぼ満席の参加者があり、写真原板のデジタル保存への関心の高さを伺わせた。

(記／内堀タケシ、撮影／和田直樹)

◆第3回技術研究会報告◆

デジタル時代の三脚＆一脚選び
～スリック、ベルボン、マンフロット、
各メーカーに聞く～

平成28年3月17日(木)

JCIIビル6F会議室 参加者：72名
講師：川村容一・土屋勝義(写真家・JPS会員)

CP+などのイベントやショップに行けば三脚＆一脚に触れたり説明を聞く事はできるが、自分の撮影対象に本当にあっているのか？使い方は間違っていないかなど、今さら聞けない疑問を抱える写真家とメーカーが一体となり、撮影機材の三脚＆一脚に触れて学ぶ機会を設ける目的で、本研究会を開催した。

まず、川村容一会员による進行で幕開けし、土屋勝義会員を講師に迎え、更にスリックからは(株)ケンコー・トキナーの田原栄一氏、ベルボン(株)からは又平泰匡氏、マンフロット(株)からは上原康充氏、折笠誠氏と各社から三脚と一脚を知り尽くしたエキスパートに集まって頂いた。ちなみにメーカーを跨いだイベントは今までなく、JPSならではのコラボレーションが実現した。各メーカーの特徴・セールスポイントなど、実機を披露しながらの解説を行った。基本的な使い方や応用の仕方を川村会員が様々な作例写真を見せながら解説した。特にタイムラプスなど三脚を駆使したデジタル動画の作例はデジタル時代ならではの作品だった。他にも最



新機種の紹介や基本的な三脚の扱い方など幅広い講義を行った。

今回、非会員の参加者が多かった。「JPSは面白いことをやっている」という会員外の方にもアピール出来たことを示している。高度な研究会も面白いが今後はこうした素朴で非会員の方も参加しやすいテーマも積極的に取り上げていきたいと思っている。

(記／熊切大輔、撮影／森下泰樹)

◆第3回国際交流セミナー報告◆

巡礼の不思議「四国遍路」&
「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」

平成28年3月24日(木)

JCIIビル6F会議室 参加者：26名
講師：桃井和馬(写真家・JPS会員)

冒頭、桃井氏は自分自身に一番合っているメディアこそカメラであり、つまり写真であると述べた。何分の1秒という写真の世界はそこに辿り着くまでの思考する時間にこそ真があり、写真を撮ることそのものの意味があると考えている。サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路も四国遍路も、撮影と同様、思索する旅であった。十年前、自己との対峙を余儀なくされた四国遍路の旅では真っ暗な道を歩き続けた際に、「もしこのライト(光)がなくなったら、天地の境も分からなくなるだろう。この光は希望であり、目標であり、夢である。その光の先に目指す世界がある」と確信したという。四国遍路は死を覚悟する道のりだったが、まるで大人のためのテーマパークのようだったとも桃井氏はユーモアを交え、語った。巡礼の道には何もないが、自分と向き合う為の豊かな時間がそこにはある。旅の先に本当の意味を感じ取り、なぜ生きるのか、なぜ歩き続けるのか、なぜ物に縛られ、執着するのか。そしてなぜ人は祈るのか？桃井氏の生涯をかけた撮影テーマのひとつである「祈り」。そして、「四国遍路」と「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」、2つの道に共通するのも「祈り」であった。

サンティアゴ・デ・コンポステーラが世界遺産に認定された背景にはヨーロッパ特有の喧嘩をしないという中世からの聖なる知恵があると桃井氏は独自の視点から紐解いた。



四国のある県庁では四国遍路の世界遺産の認定目的として宗教、歴史、経済効果を掲げたという。未だ経済大国を自負する日本の現状が垣間見て取れる。歩く意味とは、自然のメッセージに耳を傾けることだ。経済効果が目的ではないと桃井氏は締めくくった。

(記／水本俊也、撮影／小平尚典)

J P S ブック レビュー

協会に寄贈された会員の出版物を到着順に掲載致します。
(2016・1月～5月)
①発行所 ②発行年月
③サイズ (タテ×ヨコ)、頁数
④定価 ⑤寄贈者
⑥電子書籍ストア



BLUE[S]

高橋宣之

①高知新聞総合印刷 ②2015年12月
③19.8 × 29.7cm、166頁
④2,500円 ⑤高橋氏



魅惑のバレエの世界 —入門編—

渡辺真弓

写真・瀬戸秀美

①青林堂 ②2015年11月
③21 × 15cm、143頁
④1,700円 ⑤瀬戸氏



美麗世界遺産

人類の傑作、かけがえのない大自然

周 剣生

①エムディエスコーポレーション
②2016年3月 ③28 × 21cm、192頁
④2,500円 ⑤周氏



野鳥の風景

高城芳治

①東方出版 ②2015年10月
③22 × 21cm、96頁
④2,000円 ⑤高城氏



和風総本家 十六代目と十五代目 豆助 オフィシャル フォトブック

撮影・森下泰樹

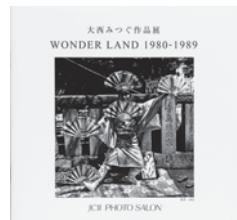
①新紀元社 ②2015年12月
③19.5 × 14.8cm、80頁
④1,200円 ⑤森下氏



クマと旅をする

前川貴行

①キーステージ 21 ②2016年2月
③21.5 × 15.5cm、144頁
④2,400円 ⑤前川氏



WONDER LAND 1980-1989

大西みつぐ

①JCII フォトサロン
②2016年3月 ③24 × 25cm、31頁
④800円 ⑤発行所



西国三十三所めぐり

中田 昭

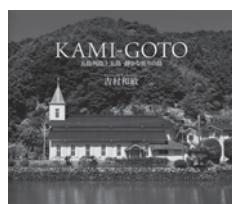
①JTBパブリッシング ②2015年11月
③21 × 15cm、175頁
④1,600円 ⑤中田氏



土門拳 写真論集

土門 拳

編集・田沼武能
①筑摩書房 ②2016年1月
③14.8 × 10.6cm、410頁
④1,400円 ⑤田沼氏



KAMI-GOTO 五島列島上五島 静かな祈りの島

吉村和敏

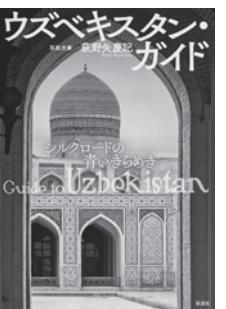
①フォトセレクトブックス
②2016年2月 ③20 × 22.5cm、113頁
④2,700円 ⑤吉村氏



写真記録 チェルノブイリと福島 人々に何が起きたか

広河隆一

①デイズジャパン ②2016年3月
③21.5 × 19cm、335頁
④3,704円 ⑤発行所

 <p>1966-2015 写真人生 50 年 上山益男写真集 上山益男</p> <p>①上山スタジオ ②2016年1月 ③29.7×22cm、120頁 ④5,000円 ⑤上山氏</p>	 <p>奈良四季の花めぐり 文・道浦母都子 写真／案内・桑原英文</p> <p>①淡交社 ②2016年3月 ③21×15cm、111頁 ④1,600円 ⑤桑原氏</p>	 <p>見わたすかぎりの花 森田敏隆、宮本孝廣</p> <p>①光村推古書院 ②2016年4月 ③17×17cm、168頁 ④1,800円 ⑤発行所</p>	 <p>大石芳野 永六輔 レンズとマイク 大石芳野、永六輔</p> <p>①藤原書店 ②2016年4月 ③19×13.5cm、243頁 ④1,800円 ⑤発行所</p>
 <p>よつごのこりす ふうちやんのぼうけん 西村 豊</p> <p>①アリス館 ②2016年3月 ③25.6×19.7cm、40頁 ④1,400円 ⑤西村氏</p>	 <p>LUMIXで広がる 4Kフォトの世界 表紙写真撮影・伏見行介 本誌撮影／文・小城崇史</p> <p>①朝日新聞出版 ②2016年4月 ③27.7×21cm、95頁 ④2,000円 ⑤小城氏</p>	 <p>ばんえい競馬 山岸伸</p> <p>①朝日新聞出版 ②2016年4月 ③29.7×22.5cm、98頁 ④1,500円 ⑤山岸氏</p>	 <p>太陽の肖像 文集 奈良原一高</p> <p>①白水社 ②2016年5月 ③21.7×15.5cm、383頁 ④3,400円 ⑤奈良原氏</p>
 <p>最後のブルートレイン 星空列車 ~輝きの瞬間~ 持田昭俊</p> <p>①宝島社 ②2016年3月 ③19×26.4cm、128頁 ④2,480円 ⑤持田氏</p>	 <p>水の惑星 市原 基</p> <p>①KADOKAWA ②2016年3月 ③14.8×21cm、111頁 ④2,000円 ⑤市原氏</p>	 <p>瞬間の顔 Vol.8 山岸 伸</p> <p>①山岸伸写真事務所 ②2016年4月 ③18.2×25.8cm、140頁 ④1,852円 ⑤山岸氏</p>	 <p>ウズベキスタン・ガイド 荻野矢慶記</p> <p>①彩流社 ②2016年5月 ③21×14.8cm、143頁 ④2,200円 ⑤発行所</p>

寄 贈 図 書

田沼武能殿.....編集・神奈川県写真師会・伝える力 写真館 100 年
増村征夫殿.....ひと目で見分ける 340 種 日本の樹木ポケット図鑑
河本美繪子殿.....監修・マツシマススム・気のむくままに
JAGDA 殿.....おいしい東北 パッケージデザイン展 2015
JCII フォトサロン殿.....大森一也・祈りの島々 八重山
.....井桜直美・一古写真に見る明治の東京—
.....荏原郡・東多摩郡・北豊島郡・南足立郡編
.....櫻木達夫・大正の写真師が見た小田原・箱根
『昨日の道 去年の坂』
KG+ 殿.....KG+2016
全日本写真連盟殿.....第 76 回国際写真サロン

内閣官房、内閣府殿

.....伊勢志摩サミット「世界に届けたい日本」フォトコンテスト
ニッコールクラブ殿.....ニッコール年鑑 2015-2016
日本カメラ社殿.....・斎場ひさとし・スズメ 光と風
.....・監修 / 共著・小松毅史・風花の会写真集 花舞台IV
日本大学芸術学部写真学科殿.....LOCUS2016
ビジュアルアーツ殿.....鶴崎 燃・海を渡って
富士フィルムホールディングス殿
.....イノベーションによる 新たな価値の創造 富士フィルムの挑戦
平凡社殿.....・現代デザイン事典 2016 年版
光村推古書院殿.....水野歌夕・京都 路地 - 迷宮の小道 -
東京写真記者協会殿.....第 56 回 2015 年報道写真展 記念写真集
東京都写真美術館殿.....黒部と槍 冠松次郎と穂苅三寿雄
東川町殿.....編者・玉村雅敏、小島敏明・東川スタイル

受賞おめでとうございます。今後ますますの活躍をご期待申し上げます。(50 音順)



■平成 28 年「日本写真協会賞功労賞」受賞 平成28年6月1日

受賞者：桑原史成（1963 年入会）

長期にわたって「水俣」など一貫したテーマを追いかけ、日本を代表する報道写真家の一人として、写真界だけでなく社会一般に影響を与え続けてきた功績に対して。



■平成 28 年「日本写真協会賞功労賞」受賞 平成28年6月1日

受賞者：廣田尚敬（1967 年入会）

独自の表現による鉄道写真の先駆けとしてこの世界を牽引する第一人者となり、日本鉄道写真作家協会の初代会長を務めるなど、鉄道写真ブームに貢献した功績に対して。



■第 10 回飯田市藤本四八写真文化賞受賞 平成28年5月14日

受賞者：南川三治郎（1972 年入会）

「アトリエの巨匠・100 人」「イコンの道」「聖地 伊勢へ」に対して。



■平成 28 年兵庫県文化功労賞受賞 平成28年5月18日

受賞者：森井禎紹（1994 年入会）

兵庫の名を高め兵庫の発展に貢献したことに対して。



■平成 28 年「日本写真協会賞作家賞」受賞 平成28年6月1日

受賞者：山岸 伸（1996 年入会）

すぐれたカメラワークにより捉えられたタレントや各界著名人、ばんえい競馬のルポルタージュ、上賀茂神社の式年遷宮を撮影した作品など、誰にとってもわかりやすくかつ秀逸な長年の写真活動に対して。

写 真 解 説

ナターシャと子どもたち（表紙写真）——広河隆一

ペラルーシで育ったナターシャは、今では立入り禁止地区になっている祖父母の村をときどき訪れていた。事故から10年ほど後に甲状腺がんが発見されたが、手術を経て今では2人の息子の母親になった。

彼女が11歳の時、私はミンスク第一病院で彼女に初めて出会った。手術室に入ってベッドの上で「もう二度と目を覚ますことはなく死んでしまうかもしれない」と泣き出した彼女に、私は手を握ってあげることしかできなかつた。

2005年に彼女の結婚式に招待された時、手術中に握っていた私の手が暖かかったのを今でも覚えていると彼女は言った。小児甲状腺がんは、早期発見できさえすれば、命にかかる病気ではないことを、ナターシャのケースは教えてくれた。写真は2014年、ミンスク、ペラルーシで撮影。

写真集『写真記録 チェルノブイリと福島 人々に何が起きたか』

“ハッピーマーケット”（顔）（表4写真）——岩永憲俊

その国の市場などを見て廻ると、食料品、日用雑貨、また趣味嗜好品や、いつの間にか部屋の隅に忘れ去られた物など、様々の物を見る事ができます。それらは時にその国の人々の暮らしをも想像させます。そしてその“もの”達は次の買主を求めて一生懸命話しかけているように見えます。

写真展“ハッピーマーケット”パリの市場から

怒涛——高橋宣之

土佐湾中央部に注ぎ込む仁淀川という川がある。河口では波形のよい波が立つことからサーファーにはよく知られたポイントになっている。3月、沖を通過する低気圧の影響を受けて荒れる海。この時期、高く立ち上がる巻き波は夕日を映し込むので、波の撮影では特別のポイントになる。運がよければ強風にあおられるオレンジ色や金色、赤色などの美しい波に出会える。ズシンと低く響く波の音。夕日の輝きを飲み込むように崩れる怒涛の姿。強い磯の香りのなかでシャッターを切る時間は写真家にとって至福の時かもしれない。

カシオペア追憶——持田昭俊

特急「カシオペア」が消えた今、過ぎ去ったことに思いを馳せる日々。あれほど無我夢中に追いかけたのは昭和50年代前半のブルトレーム以来で、心をときめかせていた。40年間追いかけて来た夜行列車の中で一番印象深かったのは、有珠山噴火災害の影響で函館本線（山線）に迂回運転した時である（写真）。自然災害に遭っても輸送ルート確保のため奔走された鉄道会社に頭の下がる思いだった。その事実を記録に留めるのはカメラマンに課せられた使命である。夕日に染まった赤い羊蹄山の美しさを色鮮やかなフジクロームペルビアで封じ込めた。

ヒガンバナ咲く江里山の棚田——森田敏隆

佐賀県小城市小城町岩藏。天山山系の南側の中腹に位置する標高250mの江里山の集落では、階段状に作られた大小様々な形の600枚の田んぼが「棚田百選」に選定されている。

9月中旬、収穫を前にした稲穂は熟れて黄金色に色づきヒガンバナが田んぼを取り囲むほとんどの畦道を真っ赤に縁取る棚田がつらなる景観は日本の原風景。

鑑賞公園脇では白や黄、ピンク色の珍しいヒガンバナが咲き多くの観光客で賑わいを見せる。

夜明けのマングローブ——深澤 武

国内最大のマングローブが広がる西表島。イリオモテヤマネコやカンムリワシなどの希少な動植物が生息しており、東洋のガラパゴスとも呼ばれている。6月下旬に梅雨が明けると、台風さえ来なければ連日晴天に恵まれることが多い。この日は穏やかな海に面したユンツ川河口で朝日を迎えた。マングローブとは汽水域に生える植物の総称であり、ここではたこ足のような形をしたヤエヤマヒルギが多く見られる。朝の光に照らされた雲が鮮やかに染まり、亜熱帯地方の暑い一日の始まりを告げているかのようだ。

軍艦島 65号棟——三好和義

昨年「明治日本の産業遺産」として世界遺産に登録された長崎県の島端島。通称「軍艦島」の名で有名な炭鉱の島です。世界遺産になる前から、この島を撮影したいと思っていました。それは、軍艦島の現役時代に撮影された奈良原一高さんの写真集を見ていたからです。過去の建物なのに、未来を感じさせる魅力的な建物だと思っていました。今回初めて上陸して、廃墟となった島をくまなく撮影しました。デジタルカメラで撮影した画像をモノクロに変換。写真展では大判カメラで撮影したかのような緻密で格調のあるモノクロプリントを目指しました。

ふしだんせつきょうし
節談説教師・祖父江省念——中川幸作

節談説教師で淨土真宗の寺の住職でもあった祖父江省念（1905-1996）は、一声二節三男の最高にして最後の説教師と謳われた。1972年頃小沢昭一の「日本の放浪芸」によって再評価された節談説はお寺での説教の他、劇場での公演が各地で行われた。写真は1975年、名古屋の劇場での公演の様子で、浪曲の発祥とされる節回しと語りに、「なんまんだぶ、なんまんだぶ」と受け念仏を唱え、会場全体が波打っていた。同年、CBS・ソニーによって製作された「親鸞聖人御一代記」、LPレコードジャケットの写真6枚が私のプロとしての初仕事だった。現在、孫の祖父江佳乃が後継者として活躍中。

地雷を踏んだ二人——上山益男

1994年、ハチク会（JPS有志32人）の中からメンバー5人でカンボジア国ブレイベン州に入りました。当時はA型肝炎の予防注射が必要でした。ハチク会がこれまでに開いたチャリティー写真展の収益で現地に「ハチクスクール」と名付けられた学校を寄贈、式典と開校式に出席のためでした。そして憧れのアンコールワットに行きました。夜明けとともにオウムの群れが参道上を飛んでいきます。崇高な神々の世界の始まりです。滞在の最終日にはブノンベンのセントラルマーケットに行きました。その時に撮影したのが「地雷を踏んだ二人」です。インドシナ戦争とそれに30年近く続いた内戦は、戦火が消えた今も傷あとです。「アジアの人々・光と影」に魅了され撮り続けています。

STONE——山口一彦

石に魅了されて、もう何年になるだろうか。初めて撮影したときは中判カメラでフィルム撮影していたが、存在感に圧倒されパワーに圧し潰されそうな気がしたので、きちんと向き合うことができる8×10のカメラで撮影するようになった。石が鎮座している所まで重いカメラ、三脚、フィルムなど担ぎたどり着く。じっくり、ゆっくりと石と対話しながらワンカット撮影。デジタルと違い緊張する一枚である。石には歴史、文化、信仰があり人ととの結び付きが昔からあり顔がある。今度どんな顔に出会えるか楽しみである。



田中 光常 名誉会員

平成 28 年 5 月 6 日逝去。91 歳。

昭和 34 年入会。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1924 年 5 月 11 日、静岡県庵原郡に生まれる。1944 年、函館高等水産学校養殖学科（現・北海道大学水産学部）を卒業、カメラ好きの兄の影響で写真を撮り始める。

1953 年より動物写真専門のフリーランス写真家として活動を開始、戦後の日本における動物写真の先駆的存在となる。1959 年入会、委員、理事を経て 1989 年から 1991 年まで日本写真家協会副会長を務め、1999 年に名誉会員に推挙されました。

田中光常先生の死を悼む

5 月 6 日、北海道釧路市で撮影中に田中先生の事務所から訃報が入った。92 歳の誕生日まであと 5 日だった。先生は昨年の 9 月頃から体調を壊され入院中だった。何度かお見舞いに伺ったが、ほとんど会話ができる状態ではなかった。辛い状態でのお見舞いは先生にとって負担になると、こんなに急に容態が悪化するとは思えなかったこともあり、北海道に出かける前にお見舞に行かなかったことが今になって悔やまれる。先生と最後にお会いしたのが約 1 カ月前の 4 月初めだった。

私が田中先生と初めて出会ったのが 48 年前、田中先生は 44 歳で私は 20 歳でした。

当時、先生は動物写真の第一人者として脚光を浴び、精力的に撮影に挑み、その勢いは大きく力強いものだった。縁があつて約 2 年間の助手を務めることになった。私の特技として電気関連技術があったので、先生のために当時はまだ無かった無人

撮影装置を開発し、改良を重ね、誰も撮影出来なかつた野生動物達の自然な姿を撮影することができるようになった。その装置を持って初めて先生と一緒に出かけたのが日本最西端の西表島だった。誰も成し得なかつた野生のイリオモテヤマネコの撮影に挑戦した時の苦しくも楽しかった思い出が昨日のことのように思い出される。田中先生から次から次に出てくる特殊な撮影アイデアを一つ一つ形にしていったことは、私の人生で一番楽しかった思い出の一つである。

田中光常先生は、1989 年に紫綬褒章、1995 年に日本写真協会功労賞、そして 2000 年には勲四等旭日小綬章を受章され、そのご活躍と業績は計り知れない。先生から学ばせて頂いた動物を愛する姿勢を、これからも大切に継承していきたいと思う。

田中光常先生、お疲れ様でした。そして有り難うございました。安らかにお眠りください。



田畠 みなお 正会員

平成 27 年 12 月 30 日逝去。

71 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（平成 3 年入会）



柳澤 一郎 正会員

平成 28 年 1 月 29 日逝去。

86 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（昭和 52 年入会）

古建築・日本庭園撮影の田畠みなおさんを偲ぶ 小野 吉彦

田畠みなおさんは、日本の古建築である茶室、数寄屋建築、日本庭園から、現代和風建築に至るまでの建築撮影を専門になさっていました。建築史や茶室研究設計の先生方からの信頼は厚く、1995 年には『桂離宮平成修理完成記念』の豪華書籍を小学館から出版するなど、多くの写真集としてその実績は残されています。

20 歳以上年下となる私も歴史的建造物撮影に携わっている関係で、JPS や日本建築写真協会に所属されていた田畠さんには、総会時にお会いするたびに古建築や撮影秘話を伺い、様々な知識を勉強させていただきました。スタンドをどこに仕込むのだろうかと思うくらい狭い茶室空間で、補助光を巧みに使いながらも、それを感じさせない自然な雰囲気に仕上げられた田畠さんの写真には、たいへん感銘を受けました。

田畠さんは静岡県伊東市の出身で、地元では伊東市文化財保護審議会会長、NPO 法人まちこん伊東、伊豆半島ジオガイド協会等の活動をされ、写真家としても、地元住民としても、ご活躍と貢献をされていました。「写真による伊東の歴史遺産保護の功績」として 2007 年度に伊豆新聞本社から「第 28 回伊豆賞」を受賞され、地元への貢献もひときわ大きかったことを表しています。これからは、田畠さんの残された多くの出版物の写真を拝見するのみとなりますが、古建築と建築写真の秘話を少しでも読み解けるよう、また少しでも田畠さんに近づけるよう、努力したいと思います。ご冥福をお祈りいたします。

総務委員会

福井県福井市生まれ、北陸高校卒業後、中日新聞に勤務。その後、独立し写真店を経営するかたわら、昭和 40 年より NHK 福井放送局嘱託写真家として活動。主に番組のスチール撮影に従事。毎週 1 回放送の写真構成番組「ふくい新風土記」を 2 年間に 88 本担当。また、朝日新聞福井版に「カメラ風土記」を 100 回連載された。

心からご冥福をお祈りいたします。



坂井 哲夫 正会員

平成 28 年 2 月 5 日逝去。

85 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(昭和 40 年入会)

総務委員会

東京綜合写真専門学校を卒業後、報道写真に携わり、月刊誌などに写真を常時掲載。昭和 39 年以降、『俊成グラフ』誌のスタッフとして活躍された。昨年、2015 年に協会創立 65 周年を記念して在籍 40 年以上の正会員に感謝状を贈呈されたことをとても喜んでいたと、ご家族から伺った。

心からご冥福をお祈りいたします。

編集後記

○今号より出版広報委員会に強力な助っ人が加わることになりました。ここにごろ、各委員の仕事の関係で委員会が流会となる事態が発生していただけたため任期途中での補充という形で、今年度新入会員の編集経験をお持ちの池口英司さんが参加していただけたことになりました。今後の会報編集の大きな戦力となるでしょう。(加藤)

○今回の号は記事に関して、最初は不確定要素が多く少し心配だったが、無事に発行することが出来た。今回も「アジアフォトフェス」、「報道の自由度の低下」、「デジタル時代のモノクローム写真」、「ドローンの活用」など興味のある記事が並んだ。この時代になぜモノクロ写真が見直され始めているのか、表現の視点からじっくりと考えてみたいと思った。(飯塚)

○今号から「撮影や表現の新たなテクニックを探る」という新企画がスタート。新しい機材やテクノロジーを作品制作や仕事にいち早く取り入れている写真家を通じて、表現やテクニックのトレンドを記録していこうという試みです。一回目では注目のドローンを紹介。次回は動画を取り上げる予定で、自薦・他薦お待ちしております。(関)

○先日の熊本地震ではまたまた出張中で、前震を長崎の佐世保で、本震を佐賀の武雄で体感しました。震度は 4 ~ 3 程度で、被災された方々と比べれば大したことはありませんが、携帯と街の防災放送が昼夜を問わず鳴り響くのは気持ち良いものではありません。撮影は影響なく終えましたが、次は東京でしょうか? いつ起きる時のことやら。(小野)

○最近、去年の今頃は何をしていたか、と考える事がよくある。昨年の 6 月初めは胆石・胆囊炎の手術で緊急入院し、委員の方々に心配をかけたのだ。遠い過去のように感じられるのは歳をとったせいか、自身の健康状態には更なる注意を向いていたとの思いで 6 月を迎えた。(小池)

○先日取材を行ったなでしこリーグのカップ戦。女子日本代表の招集期間中だったため、二種登録選手もベンチ入りするような状況でしたが、途中出場の「体の線が細いけど動きがダイナミックな選手」のプロフィールを試合後に確認して愕然。2003 年生まれの中学生でした。この世代が 4 年後を支えることを確信したり直前の 6 月でした。(小城)

○今号で「アジアのアートフェス」の記事を書かせていただきましたが、相変わらず今もアジアのあちこちを渡り歩いています。日本写真年鑑 2016 (日本写真協会編) では、アジア各地のカメラショナーについても書いています。そちらもぜひご覧ください。(柴田)

経過報告 (2015年6月~8月)

- 6 月 19 日 平成 27 年度第 1 回高校写真部顧問を対象とした「デジタル写真講座」
AM9:30 ~ 17:00 宮城県・青葉区中央市民センター 教師参加者 21 名
- 7 月 15 日 ~ 20 日 第 40 回 2015JPS 展(名古屋)
愛知県美術館 入場者数 1,490 名
- 7 月 18 日 イベント「デジタル一眼カメラで撮る『家族写真』」・入選者紹介式・講演会・木村芳文「新しい星景撮影手法」
- 7 月 16 日 ~ 22 日 2015 新入会員展(東京)
アイデムフォトギャラリー「シリウス」 出品者 34 名、作品数 68 点、入場者数 488 名
- 「私の仕事」
- 8 月 4 日 ~ 30 日 日本写真保存センター企画「被爆から 70 年 知っていますか? ... ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾」展
JCII フォトサロン 入場者数 8,300 名
- 8 月 5 日 保存センター講演会
PM2:00 ~ 4:00 JCII 会議室 参加者 112 名
- ヒロシマからの出発
- 8 月 7 日 JPS ピアーバーティー
PM6:00 ~ 8:00 森のピアガーデン 参加者 69 名
- 8 月 8 日 保存センター講演会
PM2:00 ~ 4:00 JCII 会議室 参加者 80 名
- 記録の重み - 被爆直後を撮影したフィルムの保存を
- 8 月 14 日 ~ 20 日 2015 新入会員展(大阪)
富士フィルムフォトサロン大阪 出品者 34 名、作品数 68 点、入場者数 3,074 名
- 「私の仕事」
- 8 月 25 日 ~ 30 日 第 40 回 2015JPS 展(関西)
京都市美術館別館 入場者数 1,734 名
- 8 月 25 日 イベント「浴衣で写真教室」、8 月 28 日入賞・入選者紹介式・講演会・中田昭「京都」四季のうつろい」

○ 1 月から 4 カ月かかる東京、仙台、札幌、大阪での写真展が終わりました。各地の皆様にはお世話になりました。支店や支社があった、札幌、仙台からもカメラメーカーさんが撤退したりして、アベノミクスと浮かれていたのは一部で、実は厳しい状態が続いているのだと感じた写真展でした。(伏見)

○ とある案件をチームで記録撮影したときのこと。片や ISO6400 で高速連写。フラッシュ直射でチャンスを小刻みに捉える。こちらは ISO160 すら躊躇しつつ、フラッシュをパウンド。そして単写で一瞬を狙う。同じ被写体でも、このアプローチの違い、勉強になりました。(桃井)

○ 小学校に入学した長男の運動会に参加しました。場所とりのため朝 6 時に校門前に並び、開門と同時にビニールシートを抱えてダッシュ。すわる間もなく一日中撮影に飛び回り、PTA 納引きに参加しては肩を痛める。終わる頃にはぐったりです。子どもの運動会はお父さんの運動会でもあることを痛感しました。(山縣)

○ この号から本誌の編集をお手伝いさせて頂くことになりました。よろしくお願いします。協会の事務所がある一番町は、私が 25 年前に独立した時に初めて頂いた仕事で毎日のように通った場所であります。格好の良いビル街は、しかし昼食の選択肢は乏しく、それが独立の思い出です。25 年ぶりの一番町。もう一度宝探しです。(池田)

日本写真家協会会報 第 162 号 (年3回発行) 2016 年 6 月 20 日 印刷・発行 ○編集・発行人 熊切圭介

URL <http://www.jps.gr.jp/> Email info@jps.gr.jp 本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます

頒価 1 カ年・3 回 3,500 円(消費税・送料共込)

出版広報委員 加藤雅昭(理事)、飯塚明夫(委員長)、関 行宏(副委員長)、小野吉彦、池良幸、小城崇史、柴田 誠、伏見行介、桃井一至、山縣 勉、池口英司

発行所 公益社団法人日本写真家協会 (JPS)

〒102-0082 東京都千代田区一番町 25番地 JCII ビル 303 電話 03 (3265) 7451 (代表) FAX 03 (3265) 7460

印刷所 株式会社光邦

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 3 丁目 11 番 18 号 飯田橋 MK ビル 電話 03 (3265) 0611 (代表)

Topics

Japan Photographers Society has held two large photo exhibitions. One is "JPS photo exhibition" that has held every year since 1951. Another has been held every 5 year with the every different theme. This year's theme is the "Japan's coastline and its people".

Photo Exhibition "Japan's coastline and its people"

This year is the JPS founding 65th anniversary. The photo exhibition "Japan's coastline and its people" was held at the Gallery of Tokyo Metropolitan Theater from March 1 to 13, 2016. JPS also published the same title of the photo book from Heibonsha Ltd.

Japan's coastline is 35,672 kilometers long and is consisted of about 6,800 islands. By 197 photos from 123 photographers, this exhibition tries to visually present the Japanese people and their maritime culture by travelling along that coastline, witnessing the changing scenery, its fishing communities, industrial belts, rituals and festivals, as well as capturing people's everyday lives and sites of historic importance. In this exhibition, Japan walked on as a marine nation while dealing with nature disaster such as typhoons, tsunami, and earthquakes. We can look again the today's Japan.

The exhibition will be held at Kyoto Municipal Museum of Art in June, and in Kingdom of Tonga in September, co-sponsorship with The Japan Foundation.

41th JPS Photo Exhibition started.

In this year, JPS photo exhibition travels starting from Tokyo, June 11 to 26 at Tokyo Metropolitan Art Museum, and in Nagoya, July 5 to 10 at Aichi Prefectural Museum of Art, and then in Kyoto, July 19 to 24 at Kyoto Municipal Museum of Art.

In addition to the Kyoto venue exhibition, JPS will exhibit "Do you know? Atomic bombings of Hiroshima and Nagasaki"

There were 6,717 photos from 2,015 applications for the public photo contest section. From them, 500 photos were awarded. For Young Eye section, that displayed photos from 14 vocational photography schools and departments of photography of universities and colleges. This year, JPS members' section was not held.

Recently, digital developments of cameras and printers have been very significant. We have seen the high quality photo works that technically succeeded. Digital data is easy to retouch, as the result, they tend to not express the subject straightly, and they also tend to not pursue the moments of beauty. Those works have been depended on PC techniques. We should re-recognize the real essence of expression and artistry of photography.

Please see the JPS Exhibition awarded photos from 33 to 35 pages.

About the Japan Professional Photographers Society

The Japan Professional Photographers Society was established in 1950. Through its activities it strives to define the role of the professional photographer and secure copyright protection while working to develop photographic culture. In 2001 it received recognition as an Incorporated Body from the Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology, in March 2011 it was officially recognized as being a Public Interest Incorporated Association by the Prime Minister's office, and since April 1 of that year it has been active under the title, Japan Professional Photographers Society, Public Interest Incorporated Association.

Since its foundation, the society has succeeded in receiving an extension for the period of copyright protection (to 50 years after the death of the artist), held numerous exhibitions concerning photographic history and expression (A Century of Japanese Photography, History of Japanese Contemporary Photography, Sixty Years of Japanese Children, Women, etc.), and published numerous books on photographic history and collections of photographs. In order to contribute to the promotion and development of photographic culture, it holds the JPS Exhibition as an open exhibition, presents a nationwide Photography Study Pro-

gram for elementary school students, the Photo Forum that aims to develop photographic expression, Digital Photography Lectures for the advisors of high school photographic clubs, and presents the Yonosuke Natori Photographic Award to uncover and foster new talent. At the same time, it carries out a wide range of activities to contribute the development of photographic culture, such as: cultural exchange with overseas photographers, PR through publishing and information dissemination via the Internet.

Furthermore, it presents the Japan Professional Photographers Society Award in recognition of individuals or organizations who have achieved notable achievements in the development of photographic technology, education, or critique.

The Japan Professional Photographers Society has devoted itself to the establishment of photographic museums, such as the Tokyo Metropolitan Museum of Photography, and is currently actively working towards the creation of the 'Japan Photographic Preservation Center' (archive) for the collection and preservation of original photographs.

Japan Professional Photographers Society

JCII Bldg. #303, Ichibanchō 25, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0082

Tel: +81-3-3265-7451 Fax: +81-3-3265-7460

E-mail: info@jps.gr.jp Web site: <http://jps.gr.jp/int/index-e.html>



写真家に知っておいていただきたい著作権のこと。

あなたが写真を撮った時に、
写真の著作権はあなたの**財産**となります。
そのためにはなんの**登録**も必要としません。

あなたの写真は、著作権というとても**強い権利**で、
あなたの**死後も50年間にわたって**守られますが、
著作権を**譲渡する契約**によって撮影された写真は、
その権利を**失い**、回復することは**困難**です。

写真家はでき得る限り、
「写真の著作権を保持するべきだ」
と私たちちは考えています。

写真著作権を大切に。

一般社団法人日本写真著作権協会(JPCA) 〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 JCIビル3階 Mail: info@jpca.gr.jp

【正会員団体】 公益社団法人日本写真家協会／公益社団法人日本広告写真家協会／一般社団法人日本写真文化協会／日本肖像写真家協会
一般社団法人日本写真作家協会／全日本写真連盟／一般社団法人日本スポーツプレス協会／日本自然科学写真協会
日本風景写真協会／公益社団法人日本写真協会 (以上、10団体)

この広告は、公益社団法人日本複製権センターからの分配金による公益事業の一環として制作されています。



インクジェット・プリントを極める ファインアート・プリントサービス

作品イメージを極限まで表現した「ファインアート・プリント」を国内外有数の6種類のアーティスト用紙でご提供します。それぞれの個性と美しさをお楽しみください。

漆喰の特性をインクジェットに生かす

《フレスコジクレー》

●タイプS(スムース) / タイプR(ラフ)

繊細さと優雅さが特長の

《ハーネミューレ・ファインアート》

●ファインアート・パライタ / フォトラグ

インクの重なりが表情豊かに仕上げる

《ヴァンヌーボ》

●ファインアート・ヴァンヌーボSW

柔らかで優しい印象に仕上げる

《伊勢和紙 Photo》 ●雪色 / 芭蕉

デジタル銀塩プリントを極める ネット@ザ・プリント

銀塩の表現力を最大限に活かしたラムダプリントで、作品表現に最適な組み合わせが選べ、ドライマウント・マットパネル・アルミフレームのパネル加工も同時に注文できます。

プリント

- ペーパー: コダックプロ、メタリックの2タイプ
- サイズ / ページ: 六ツ切 ~ B1までの19タイプ
- フチ取り: 白フチ、黒フチ、フチなしの3タイプ

パネル加工

- 高級アルミフレーム (額縁 / シルバー、ブラック)
- マットパネル (オフホワイト、ブラック)
- ドライマウント

銀塩フォトブックを極める ネット@ザ・フォトアルバム

多彩な編集機能と仕様でさまざまな用途に合わせ、表紙はハードとソフト、本文は高級銀塩写真とオンデマンド高精細印刷の各2タイプでオリジナリティ溢れる作品集ができます。

《PRO》シリーズ

- 高級写真タイプ: 銀塩光沢印画紙+液ラミ
- サイズ / ページ: 160SQ、A5、197SQ、A4、10~50p
- カバー: ソフト (ブックケース付)
ハード (くるみ表紙)

《ENJOY》シリーズ

- 高級精細印刷タイプ: 表紙 / マットPP加工
- サイズ / ページ: 200SQ、A4、20~50p
- カバー: ソフト (並製本)、ハード (上製本)

堀内カラー



HCL フォトギャラリー新宿御苑

東京都新宿区新宿1-6-5 ☎03-3226-9602

- 平 日=10:00~19:00 ●土曜=10:00~17:00
- 最終日=10:00~15:00 ●休館日=日曜・祝日・年末年始
- 地下鉄丸の内線「新宿御苑前駅」新宿門口より徒歩1分



HCL フォトギャラリー名古屋

名古屋市中区錦1-11-20 大永ビルディング2F ☎052-211-6151

- 平 日=9:00~18:00 ●土曜=9:00~17:00
- 最終日=9:00~13:00 ●休館日=日曜・祝日・年末年始
- 地下鉄鶴舞線・東山線「伏見駅」10番出口より徒歩1分

フォトイメージングセンター (フォトアート)

東京都杉並区和田1-6-7 ☎(03)3383-3358

フォトイメージングセンター (旧新宿事業所)

東京都新宿区新宿1-6-5 ☎(03)3226-9581

青山サービスセンター

東京都渋谷区神宮前3-41-6 ☎(03)3479-5351

神田サービスセンター

東京都千代田区神田小川町2-6-14 ☎(03)3295-2191

東京サービスセンター

東京都杉並区和田1-6-7 ☎(03)3383-3321

名古屋サービスセンター

名古屋市中区錦1-11-20 ☎(052)211-6151

関西営業部

大阪市北区万歳町3-17 ☎(06)6313-2351



19世紀に誕生した銀塩写真は、芸術、報道など様々な分野で歴史を写し続けてきました。デジタルが中心の時代になっても、フィルムが描く独特な表現はその輝きを失いません。そして、富士フィルムが総合感材メーカーとしてフィルム開発のなかで培ってきた、独自の技術とアイディアによる高画質へのこだわりは、最新のデジタルカメラ「Xシリーズ」にも綿々と受け継がれています。伝統のフィルムと最先端のデジタル、その表現手法は違っても、製品の開発、製造にかける富士フィルムの情熱は同じです。



かけがえのない写真文化を伝えたい。
富士フィルムのプロフェッショナル写真製品

FUJIFILM
Professional
Photo Products

Another 5.



約5060万画素、もうひとつの5D登場。

EOS 5Ds

約5060万画素フルサイズCMOSセンサーを搭載した、もうひとつの5D。

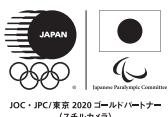
EOS 5Ds R

5Dsの解像性能を最大限に引き出す
ローパスフィルター効果キャンセルモデル。

●新開発 有効画素約5060万画素フルサイズCMOSセンサー ●映像エンジン「デュアル DIGIC 6」 ●常用ISO感度100～6400 拡張:12800 ●最高約5コマ/秒の連写性能 ●61点高密度レティクルAF ●顔や色を検知して被写体を追尾する「EOS iTR AF」 ●高画素による繊細な質感を表現する新ピクチャースタイル「ディテール重視」と新シャープネス項目「細かさ」「しきい値」 ●モーターとカムギアでミラーの駆動と速度制御を行いカメラブレを軽減する「ミラー振動制御システム」 ●徹底的なブレ対策のために強化した高剛性三脚座 ●ミラーアップとシャッターボタン押しに伴うカメラブレを解消する新機能 レリーズタイミング任意設定 ●EOS初、約1.3/1.6倍クロップ撮影機能



EOS 5Ds / EOS 5Ds R
は欧州で権威のある
写真・映像関連の賞
「EISAアワード 2015-
2016」を受賞しました。



JOC・JPC 東京 2020 ゴールドパートナー
(スチルカメラ)



EOSは2015年11月10日に累計
生産台数8,000万台、EFレンズは
2015年6月22日に累計生産本数
1億1,000万台を達成しました。



◎キヤノン EOS ホームページ

canon.jp/eos

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

焦点距離：85mm

露出：F/3.2

1/100 秒

SP 85mm F/1.8 VC

高い解像力と自然なボケ味のハーモニー。
手ブレ補正機構「VC」を世界初搭載*。
人を撮るために誕生した、
新次元の中望遠単焦点レンズ。
タムロンSP 85mm F/1.8。

SP 85mm F/1.8 Di VC USD (Model F016)

キヤノン用、ニコン用、ソニー用 **

Di:35mm判フルサイズおよび
APS-C サイズ相当デジタル一眼レフカメラ用レンズ

*35mm判フルサイズ対応のデジタル一眼レフカメラ用85mm F/1.8レンズにおいて。

2016年1月現在。(タムロン調べ)

** ソニー用は、手ブレ補正機構「VC」を搭載していません。



TAMRON

www.tamron.co.jp

フィルムをデジタルで楽しもう スキャナーが広げる写真の可能性

EPSONは、スキャナーを使ってフィルムをデジタル化し、インクジェットプリンターでプリントする楽しみ方を提案します。大判プリントも容易になり、フィルム作品の可能性や表現力が大きく広がります。

◆デジ／アナのハイブリッドなワークフローを提案

写真の主流はフィルムからデジタルへとすっかり移り変わりましたが、今でもフィルムでの撮影を続けているプロ写真家や写真愛好家は少なくありません。また、多くの写真家が過去に撮った大量のフィルムを大切に保管しています。

フィルムでの撮影を続けている写真家や過去のフィルム作品を活用したい写真家に対して、エプソンが提案するのが、フィルムをデジタル化したのちさまざまな処理を行う、いわゆる「明るい暗室」のワークフローです（図1）。アナログとデジタルのハイブリッドともいえるでしょう。

ひとたび高画素でデジタル化しておけば、サイズに制約のある印画紙での引き伸ばしとは違って、インクジェットプリンターを使った大判プリントも可能になるほか、作品をインターネットで公開するのも簡単です。カビの発生などフィルムの劣化に対するバックアップにもなります。

◆ハイエンドの実力を備えたGT-X980

フィルムをデジタル化するにはフィルムスキャナーを使う方法が一般的です。エプソンでは1992年発売のフラットベッドスキャナー「GT-8000」および「GT-6000」からフィルムスキャナーをサポートしてきました。

20年以上の技術が詰まった現在のハイエンドモデルである「GT-X980」は、35mmストリップ（スリープ）、35mmマウント、最大6cm×20cmまでの中判、および4×5（シノゴ）を、最大6400dpiという高い解像度でスキャナンすることができます（制約はありますが8×10大判フィルムのスキャナンも可能）。35mmの場合で、フィルムの条件や状態にもよりますが、A3を超えるプリントにも対応できるデータが得られます。

フィルムスキャナーで課題になるフィルムの平面性を高めるために、GT-X980ではアンチニュートンリングアクリル板と圧着ガイドとを設けたフィルムホルダーを新たに開発（図2）。加えて、被写界深度を高めたフィルムスキャナー専用レンズを搭載とともに、ガラス面からフィルム面までの距離もホルダー側で調整可能にすることで、ピント精度を高めています。

スキャナードライバ「EPSON Scan」には、フィルムの濃度に応じた自動露出や逆光補正、カラーネガで起

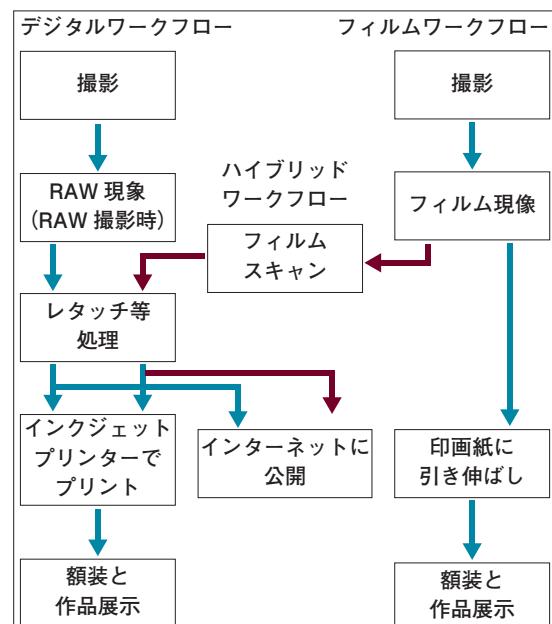


図1. フィルム撮影とデジタル処理とを組み合わせたハイブリッドなワークフローを提案

こりやすい退色の復元、ホコリやキズの自動検出と補正を行う「DIGITAL ICE」などの諸機能を搭載し、フィルムの実力を最大限に引き出すよう工夫しています。

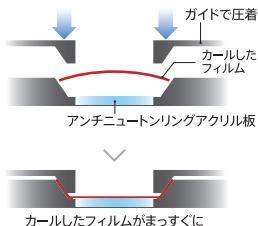


図2. フィルムホルダーの仕組み

◆地元の銭湯をフィルムで撮影しデジタル化

地元の三重県に残る銭湯の様子を大判(4×5)のネガフィルムに記録し続けている写真家の松原 豊氏(日本写真家协会会员)は、前述のようなハイブリッドなワークフローを実践するユーザーのひとりです。

「仕事での撮影はほぼすべてデジタルですが、銭湯をテーマにした自分の作品は形あるモノとして残したいと考えて、今もフィルムを使っています。ただし印画紙での引き伸ばしは半切程度が限界になるため、大判のプリントにも対応できるように、撮影したあとはすべてデジタルで処理しています」と松原氏。

撮影にはリバーサルフィルムではなくラチチュードの広いカラーネガを使い、露光をやや多めに与えて、少し濃い目のネガを作るよう工夫。

スキャナにはエプソンの旧モデルである「GT-X900」を利用。スキャナードライバのオート設定には頼らず、

後処理を考えてハイライトやシャドウの階調を残した「やわらかいデータ」(松原氏)になるようにスキャンパラメータをマニュアルで設定し、フィルムサイズに応じて1200dpiから2400dpiの16ビットTIFFとしてデータ化。その後、Adobe Photoshopで色やトーンを調整し、インクジェットプリンターで出力して作品として仕上げている

そうです。

「フィルムのスキャナにはGT-X900以前からエプソンのスキャナを使ってきましたが、コストパフォーマンスがとても高いと感じます。大判プリントにも十分に対応できるデータが得られるため、作品制作には欠かせないツールのひとつになっています」と松原氏は評価しています。

なお、同氏の作品は2016年1月29日から2月18日にかけて「エプサイトギャラリー」で開催された「インクジェットの本流～JPS会員によるプリント競演展～」に最大A0サイズで展示され、大判フィルムならではの精緻な描写とあいまって好評を博しました。

◆プライベートラボにもスキャナーを設置

エプソンはデジタル版レンタル暗室ともいえる「プ

4×5サイズのネガフィルムで撮影しエプソンのフラットベッドスキャナーを使ってデジタル化された松原氏の作品(三重県松阪市にある春日温泉)



© Yutaka Matsubara

「プライベートラボ」を西新宿にある「エプソンイメージングギャラリー エプサイト」内に開設しています。プライベートラボには、最新のインクジェットプリンターとして最大64インチ(約1,626mm)幅のプリントが可能な大判プリンター「SC-P2005PS」およびA2ノビ/17インチ幅ロール紙に対応した「SC-PX3V」の2機種と、フラットベッドスキャナ GT-X980を設置しています。

日本写真家协会会员の皆様には、プライベートラボの利用に必要な「アドバンストメンバーズ」への登録料(5,400円/年)や使用料など、会員特典がございます。プリントだけではなくフィルムスキャナにもぜひご活用ください。

プライベートラボの詳細やスキャナーの利用料金等についてはエプサイトのウェブページをご参照いただくか、直接お問い合わせください。日本写真家协会会報の159号でもご紹介しています。

エプソンイメージングギャラリー エプサイト

東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル1階

開館時間：10:30～18:00

(日曜日、夏期、年末年始を除く)

TEL：03-3345-9881

WEB：<http://www.epson.jp/katsuyou/photo/taiken/epsite/>

※ 製品名やサービス名は各社の商標または登録商標です

GT-X980

●型式：卓上型フラットベッドカラーイメージスキャナー ●走査方式：読み取りヘッド移動型原稿固定読み取り ●搭載センサー：a-HyperCCD II オンチップマイクロレンズ付6ラインカラーCCD (R/G/B×2ライン) ●光源：白色LED ●光学解像度：6,400×9,600dpi(フィルムホルダー使用時)、4,800×9,600dpi(反射原稿/フィルムエリアガイド使用時) ●読み取り解像度：50～6,400dpi(1dpi刻み)、9,600dpi、12,800dpi ※1 ●最大原稿サイズ：A4, USレターサイズ ●インターフェイス：Hi-Speed USB ●外形寸法(幅×奥行×高さ)：308×503×152.5mm ●質量：約6.6kg ※1 読み取り解像度が高解像度になると、読み取り範囲は制限されます／ホームモードでは50～4,800dpi(1dpi刻み)



At the heart of the image

未知なる光を、捕捉せよ。

未踏の領域を切り拓く、動体捕捉力。ペールを脱いだ、高感度性能。

153点AFシステム、進化した連続撮影性能、最高常用感度ISO 102400、4K動画機能…
すべての刷新は、かつてない光を捉える為に。世界はついに、新たな世界を手に入れた。



D5

NEW 価格: オープンプライス

□99点のクロスセンサーを含む広域・高密度の153点AFシステム □AF/AE追従で約12コマ/秒、14ビット記録ロスレス圧縮RAW
でも最大200コマ*まで可能な高速連続撮影 □ニコン史上最高の常用感度ISO 102400(Hi 5:ISO 3280000相当まで増感可能)
□自社新開発のニコンFXフォーマットCMOSセンサー □新画像処理エンジンEXPEED 5 □4K UHD動画対応 □タッチパネル採用の
3.2型 約236万ドット高解像度モニター *Lexar Professional 2933x XQD 2.0のメモリーカードを使用した場合。 ●記録媒体は別売りです。

 ニコンカスタマーサポートセンター 0570-02-8000

一般電話からは市内通話料金でご利用いただけます。営業時間9:30~18:00(年末年始、夏期休業等を除く毎日) ●ナビダイヤルがご利用いただけない場合は、(03) 6702-0577 におかけください。 ●ファクシミリでのご相談は、(03) 5977-7499へご送信ください。

www.nikon-image.com

株式会社ニコン・株式会社ニコンイメージングジャパン

SIGMA

世界初^{*}開放F値1.4の

フルサイズ用超広角レンズ、誕生。

※35mm判フルサイズをカバーするデジタル一眼レフカメラ用
交換レンズとして(2015年10月現在、当社調べ)

A Art

20mm F1.4 DG HSM

希望小売価格(税別)150,000円 ケース、かぶせ式レンズキャップ(LC907-01)



シグマの新しいプロダクト・ラインについては、こちらへ。

sigma-global.com



Photo Iwanaga Noritoshi